

VIEW21

ビュー21

2017

Vol. 3

教育委員会版

特集

資質・能力を育む 授業づくり

事例1 福島県新地町

ICTを活用した新しい学びを展開

事例2 宮崎県 日南市立油津中学校

「油中サイクル」とキャリア教育で協働性や課題意識を育む

事例3 神奈川県 川崎市立東菅小学校

思考力を育む「すべ」で、子ども主体の授業に

特別企画

どうなる？ どうする？ 道徳の教科化〈前編〉

教科化によって
授業をどう変える？

連載

教委と現場で進める

学力向上へのステップ

岩手県北上市

学力調査の結果を基に小・中で指導改善を推進

主体的・対話的で深い学びを実現！

アクティブ・ラーニング実践講座

東京都 立川市立第九小学校

課題設定の工夫とICTで対話を深める



激変する社会に向け、「知識の教授」から「学びのサポート」へ

株式会社 CA Tech Kids 代表取締役社長

上野朝大 うえの・ともひろ

立命館大学国際関係学部卒業。株式会社サイバーエージェントでインターネットマーケティング等に携わり、同社の子会社として株式会社CA Tech Kidsを設立。文部科学省のプログラミング教育に関する有識者会議等で委員を務めた。

CA Tech Kids プロフィール

2013年5月設立。小学生向けのプログラミング教育を行う教室「Tech Kids School」を、全国8か所で展開。小学生約1,000人が継続的に学習しているほか、全国でワークショップや学校へ出張授業などを手がけている。

今後十数年の間に第4次産業革命と呼ばれる劇的な社会変化が起き、AI（人工知能）やロボット技術の発達により、従来人間が担ってきた様々な仕事が代替されるようになると予見されています。このような時代において、社会を動かす中心となるのは、コンピューターサイエンスの力です。子どもたちに、コンピューターの持つ力のすごさや可能性を知ってもらい、その力を自分の武器として身につけてほしいとの思いから、私たちは2013年からプログラミング教育を行ってきました。

教育のあり方全体も変化を迫られています。インターネットの普及により、「普遍的な知識」の価値は相対的に下がり、予測困難な社会変化の中で、「経験」もあまり価値を持たなくなってきたと感じます。このような時代に求められるのは、知識や経験を基に自分で考え、判断し、ゼロから何かを創り出していく力です。誰かに敷かれたレールに乗るのではなく、自分のレールは自分で敷

くという姿勢が大切なのです。

私たちの教室では、プログラミングの知識・技術・考え方の習得はもとより、「自分の力で主体的に物事を前に進める力」を育成することを目指しています。生徒がアプリやゲームなど自身のオリジナル作品を開発する際には、作品の企画・設計から、開発計画（スケジュールや段取りなど）の策定まで、企業が行うプロジェクトマネジメントと同じような流れを体験させ、考えを形にしていく力を養います。自分のアイデアを実現

する主役はあくまで生徒自身で、我々はサポートに徹します。

学校においても、先生方の役割を「知識の教授」から、「学びのサポート」へと変化させていく必要があるのではないのでしょうか。次期学習指導要領で示された、「主体的・対話的で深い学び」というコンセプトは、まさにその重要性を示すものだと思います。大きな転換点であり、困難を伴うことですが、10年後、20年後の社会を生きる子どもたちのために、今、変化が必要だと感じます。

近未来への布石 プログラミング教育

上野社長が運営するTech Kids Schoolでは、以下のような年間40コマのカリキュラムを通して、コンピューターに関する知識だけでなく、設計力や表現力、主体性も養っている。

ステップ	活動	内容
①	教材学習 (知識のインプット)	自学スタイルで、ウェブ教材を使ってアプリやゲームを1授業1作品のペースで開発しながら、知識のインプットと復習を繰り返し、プログラミングの基礎を学ぶ。
②	オリジナル開発	自分のアイデアを具体化し、計画を立て、開発に落とし込むことで、自分だけのオリジナル作品を作る。
③	展覧会・ プレゼンテーション	作品の展覧会や教室外でプレゼンテーションを行う機会も定期的に設け、社会に対して積極的に働きかける姿勢や人前で話す度胸、次への意欲、新たなアイデアを生み出す力を育む。

*CA Tech Kids提供資料を基に編集部で作成。

資質・能力を育む 授業づくり

新学習指導要領では、「資質・能力の育成」が謳われている。

これからは、学校全体で育みたい「資質・能力」を定義し、カリキュラム・マネジメントを通して、計画的に身につけたい資質・能力を各授業で焦点化して養成していくことが必要となる。

そこで今号の特集では、「資質・能力の育成」という観点から、

これからの授業のあり方を、有識者からのアドバイスや先行事例を通して考えていきたい。



入試で問われる力も変化してきている

モデル問題例2

問 転勤の多い会社に勤めているサユリさんは、通勤用に自動車所有しており、自宅近くに駐車場を借りている。以下は、その駐車場の管理会社である原パークとサユリさんが締結した契約書の一部である。これを読んで、あとの問い(問1~3)に答えよ。

駐車場使用契約書

貸主 原パーク(以下、「甲」という。)と 借主 ○○サユリ(以下、「乙」という。)は、次のとおり駐車場の使用契約を締結する。

第1条 合意内容
甲は、乙に対し、甲が所有する下記駐車場を自動車1台の保管場所として使用する目的で賃貸する。

(駐車場の表示)
住所 東京都新川市新川朝日町2丁目3番地
名称 原パーク第1
駐車位置番号 11番

第2条 期間
乙の使用する期間は、平成28年4月1日から平成29年3月31日の一年間とする。契約期間満了までに甲、乙いずれか一方から何等の申し入れがない時は、さらに一年間の契約が自動的に更新されるものとする。

第3条 駐車料金
乙は、以下のとおり駐車料金を支払うものとする。
敷金(※注) 金20,000円
月額駐車料金 金21,600円(税込)
支払期日 毎月末日までに翌月分を支払うものとする
支払方法 甲指定の銀行口座への振込

第4条 駐車料金の改定
甲は、この契約期間中、物価の変動、経費の増加、近隣駐車料金その他の経済情勢の変動により、月額駐車料金が不相当と認められるときは、これを改定できるものとする。

実社会との
かかわりが深い文章を
題材としている。

第5条 乙の注意義務
乙は、駐車場の使用にあたって、次のことをしてはならない。
(1) この契約により取得した権利を他に譲渡又は転賃すること。
(2) 他の駐車場使用者の迷惑となること。
(3) 爆発物や危険物等、法律で禁止されているものを持ち込むこと。
(4) 甲が定める駐車場の管理規則に違反すること。

第6条 解約事由
乙に次のことがあった場合には、甲は何らの催告を要せず、この契約を直ちに解除できるものとする。
(1) 駐車料金の納期期限後、1か月を超過しても支払いがないとき。なお、その場合は、超過した1か月分についても駐車料金が発生するものとする。
(2) 前条に定める注意義務事項に違反したとき。

第7条 途中解約
契約期間中であっても、乙は甲に対して解約日の1か月前までに、甲は乙に対して6か月前までに書面により予告することによって、本契約を解約することができる。ただし、乙はこの予告なしに本契約を解約するときは、1か月相当額の駐車料金を支払うものとする。

第8条 返還義務
乙は、この契約を終了又は解約したときは、解約日の翌日から甲に駐車場を明け渡さなければならない。

(※注) 敷金…土地の賃貸借に際して、賃料の支払いやその他の契約上の債務を担保するために、借主から貸主に交付される金銭のこと。

問1 駐車場使用契約を行った3か月後のある日、サユリさんのもとに、原パークの担当者から電話があった。
「もしも、原パークですが、サユリさんですか? いつもご利用ありがとうございます。現在、サユリさんには駐車料金を毎月21,600円払っていただいておりますが、このたび24,840円に値上げすることを決定いたしました。来月分より新料金でのお振り込みをよろしくお願いたします。」
サユリさんは、この突然の値上げに納得がいけないので、原パークに対して今回の値上げに関する質問をしたい。契約書に沿って、どの条文的、どのような点について質問したらよいと考えられるか。解答の文末が「~について質問する。」となるようにして、40字以内で述べよ(句読点を含む)。

場面の中で
テキスト(情報)を
的確に読み取る力や、
設問中に示された条件に従い、
目的に応じて表現する力が
問われる。

新しい傾向の記述式問題

上図は2017年5月に公表された、2020年度から導入予定の「大学入学共通テスト」*1における国語の記述式問題のモデル問題例だ。

今回の出題は、問題の素材が評論や小説などでなく、契約書などの非連続な文章で構成されていたり、それらについて会話をしている文章も登場したりと、従来あまり見られなかった形式となっている。また、問題を解くためには、与えられた複数の素材から情報を把握・整理・選択して解答を導き、それを言葉や文章にして表現する力が求められる。

*1 現在行われている「大学入試センター試験」の後継として位置づけられるテストで、これまでのマークシートのみから国語・数学では記述式問題も出題されることが決定している。

思考力・判断力・表現力がより問われる

これらはPISA*2や文部科学省「全国学力・学習状況調査」のB問題の内容にも通じる出題といえる。社会が大きく変化していく中、今後、入試において、このような思考力・判断力・表現力を問う傾向はますます強まると予想される。また、テスト形式での出題は難しいが、ポートフォリオ評価などを通じて主体性や協働性などを測ることもより重視されていこう。

このように、新学習指導要領で育成を目指す資質・能力は、入試改革にも大きな影響を及ぼしつつある状況だ。

*2 Programme for International Student Assessmentの略。OECD(経済協力開発機構)が15歳児を対象に3年ごとに行う国際的な学習到達度調査。

上記のような状況を踏まえて、これから小・中学校段階でそれらの資質・能力をどのように育成していけばよいか、次のページからそのヒントを探っていこう。

「すべ」を育む声かけの工夫で、授業の質を高める

日本体育大学大学院 教育学研究科長 ^{かどや}角屋重樹

子どもたちの資質・能力を育むためには、どのような視点で授業づくりを進めればよいか。長年、理科教育を中心にPISA型学力の育成を研究し、子どもたちに学ぶ「すべ(術)」を身につけさせることを提唱している日本体育大学大学院の角屋重樹教授に話を聞いた。

資質・能力をどう伸ばすか

B問題低迷の背景に「すべ」の育成の欠如

新学習指導要領で掲げられた「資質・能力」(図1)にそもそも大きな影響を与えたのは、PISA*1です。

PISAはこれまでも、文部科学省の施策や学習指導要領に大きな影響を与えてきました。国際化や情報技術の進展などにより、主体性や自己の確立、他者に考えを的確に伝える表現力などが今後ますます求められていきますが、同調査の結果から日本の子どもはそのような力が十分でないことが明らかになりました。特

に、根拠を持って自分の言葉で考えを述べる問題で、諸外国の子どもと比べて無答率が高かったのです。

そこで、文部科学省は、思考力・判断力・表現力や主体性などの育成を強化するため、2007年に学校教育法を改正し、①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③主体的に学習に取り組む態度という「学力の3要素」を示しました。PISAでは「思考力・判断力・表現力」が重視されていますが、日本の学力観では「知識・技能」も重視しているのが特徴で、3要素をバランスよく育むことを目指しています。

そうした考えの下、「全国学力・学



かどや・しげき 広島大学、宮崎大学で助手、助教授を経験した後、文部省(当時)初等中等教育局教科調査官、広島大学大学院教授、広島大学附属福山中・高校校長、広島大学副理事(附属学校担当)、国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部部长、日本体育大学児童スポーツ教育学部教授等を経て、現職。著書に『新学習指導要領における資質・能力と思考力・判断力・表現力』(編集代表、文溪堂)等がある。

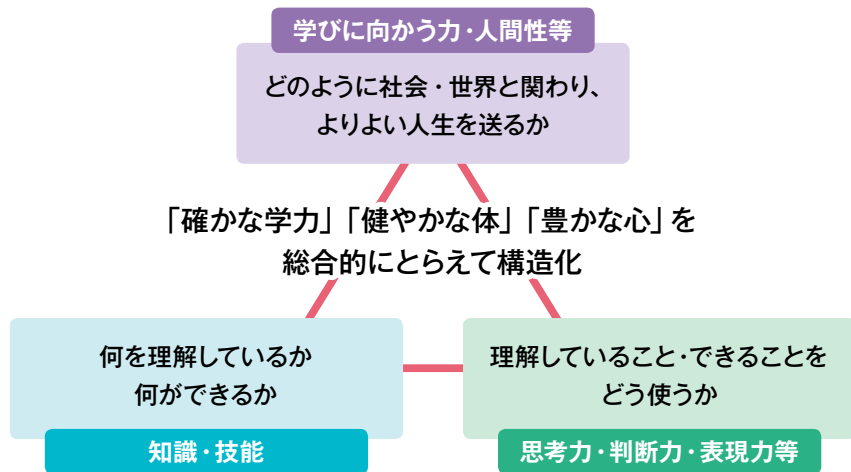
習状況調査」は、基礎的な知識・技能を測る「A問題」と、知識・技能の活用力を測る「B問題」で設計されています。ところが調査開始以降、A問題と比べてB問題の正答率が低い状態が続いており、記述式問題の無答率の高さも問題視されています。

私はこの背景に、B問題を解くために必要な思考力・判断力・表現力を身につける「すべ」を、学校できちんと育てこなかったことが、大きな要因としてであると捉えています。

「すべ」はスキルや方法とも言えるもので、それを繰り返し使うことで型が身につく、そこに自分なりの工夫を加えることで、資質・能力が育まれていくのです。

子どもには、学ぶために必要な力

図1 新学習指導要領で育成を目指す「資質・能力」の3つの柱



* 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」を基に編集部で作成。

*1 P.3 参照。

が、最初から備わっているわけではありません。例えば、授業ではよく先生が「〇〇について考えましょう」と投げかけますが、それだけではどう考えればよいのか子どもには分かりません。考える「すべ」を子どもに与えることが必要なのです。

また、資質・能力の育成においては、授業と「育てたい人間像」「そのために育成すべき資質・能力」とを一体的に捉える必要があります。

「主体的・対話的で深い学び」の手法にとかく目が行きがちですが、まずは自校の学校教育目標を立て、その達成に向けて子どもにどんな資質・能力を育めばよいのか、そして、それを各教科に落とし込むとどんな力になるのかを明確にすることが、授業づくりの起点となるのです。

思考力●指導のポイント

「比較」や「関係づけ」など考えるための視点を示す

では、具体的に資質・能力を育む授業づくりについて考えていきます。

思考力を育成するためには、子どもに考える時間を与えるとともに、考えるための視点を示すことがポイントになると考えます。具体的には、①違いに気づいたり、比較したりする「すべ」と、②対象と既存の知識を関係づける「すべ」を与える必要があるのです(図2)。

例えば、理科の授業で植物の成長について学ぶ場面では、花が咲いた朝顔と枯れた朝顔を並べて比較させ、「何が違うかな?」と問いかけて、その違いに気づかせます。比較の例としては、ほかに、満月と半月と下弦の月の形、足の速い子と遅い子の走り方などが考えられます。

次に、なぜそうなるのかを考えさせます。その際にも、ただ「原因を考えよう」と言うのではなく、「以前

図2 思考・判断・表現の「すべ」

思考の「すべ」

①比較して、違いに気づく

- 比較する視点の明確化
- 何と何を比較するのかという比較の対象の明確化

②対象と既存の知識とを関係づける

- 何と何を関係づけるのかという関係づけの対象の明確化
- どのような関係で関係づけるのかという関係づけのしかた
- 既存の知識を基に類推するなどの関係づけ

判断の「すべ」

①目的や見通しの明確化

- ②目的や見通しと実行計画を関係づけて適切なものを選択
- ③実行結果を目的や見通しと関係づけて適切なものを選択

表現の「すべ」

①目的や見通しの下に実行し、表現する内容を獲得

- ②実行結果を目的や見通しなどと対比して、的確に整理して表出

*角屋教授提供資料を基に編集部で作成。

習った〇〇はどうだったかな?」など、既習事項を想起させるような発問をすることが大切です。

このように、「これを見てどう思う?」「なぜかな?」など漠然とした言い方でなく、考える視点を提示し、何と何を比較するのか、何と何を関係づけるのか対象を明確化することで、子どもは考えやすくなるのです。

判断力●指導のポイント

目的を意識してこそ適切な判断ができる

判断力で最も重要な「すべ」は、目的や見通しを明確に持つことです(図2)。それと照らし合わせれば、取捨選択がしやすくなるからです。適切な判断ができない時は、目的を忘れてしまっていることが往々にしてあるものです。

例えば、理科の授業で実験結果を考察する場面では「予想に対して、結果はどうだったかな」と発問して、実験の目的を思い起こさせ、予想と結果を照らし合わせて判断できるようにします。子どもは実験結果に固

執しやすいので、どのような予想をして、どのような手順で実験を進めたのか、過程を振り返らせることも、適切に判断させるためには有効です。

目的意識は、社会科見学や体験学習などの際にも重要になります。学習の目的を明確に持っていないと、訪問先で何を見て、どのような情報を得ればよいのかが途中で分からなくなり、ただ楽しいだけの体験で終わってしまいかねないからです。

「何のために、何が必要か」という振り返りの習慣をつけさせることで、判断力は育まれていくのです。

表現力●指導のポイント

伝えたい内容とともに重要な、的確に整理して表現する「すべ」

表現力の育成には、2つのポイントがあります(図2)。それは、表現すべき内容を持つこと、そして、的確に整理して表現するためのスキルを身につけることです。

例えば、「表を見て、考えたことを書いてみよう」という発問では、「表を見れば、得られる情報が分かる」

ことが前提になっており、もし情報がつかめなければ書くことはできません。そこで、まず「何のために表を見るのか」という目的を意識させ、表現すべき内容を獲得させることが、表現に向けた第1段階となります。

そして、第2段階では、その内容を伝える相手や状況に応じて整理させます。表現力を高めるための「すべ」として、「最初に結論を言う」「3つの要点にまとめる」「発言の根拠を盛り込む」といった型を示し、表現のスキルを身につけさせましょう。

話を聞く場合にも「すべ」があります。ただ「話を聞こう」ではなく、「自分の考えと相手の考えはどう違うか考えながら聞こう」と伝え、比較しながら聞かせることで、より積極的に聞く姿勢を育むことができます。また、話し合いでは、相手の意見に善し悪しをつけるのではなく、話した内容が伝わったかどうかを判断させることで、「伝わる表現」「伝わらない表現」の違いに気づくことができ、表現力が磨かれていくでしょう。

知識・技能 ● 指導のポイント

目標を自分で決めさせ、適切な声かけで意欲を高める

知識・技能を身につけるために重要なのは、「自己決定」と「学習方法の指導」だと考えます(図3)。

例えば、漢字の学習で「来週テストをするから、この10個の漢字を覚えておくように」という宿題をただ一方的に課してしまうと、テストの強迫によって覚えさせるといふ受け身の学習になってしまいます。そこで、発想を転換し、覚える数を子ども自身に決めさせ、学習に主体性を持たせるのです。

その際、漢字を覚えるための「すべ」を指導することが大切です。それは、「間隔を置いて繰り返す」「忘れたら

図3 知識・技能の「すべ」と、学びに向かう力の「すべ」

知識・技能の「すべ」

① 学習の目標を自分で立てる

自分で目標を設定し、計画・実行させることで、やればできるという自信や有能感を持たせる。

② 覚え方を指導する

例えば、朝・昼・夜、1週間後・1か月後・3か月後と、間隔を空けて繰り返す。

学びに向かう力の「すべ」

① できている人、よい手本のまねをさせる

優れた人の考え方や行動、手法をまねさせる。また、そのために学級全体で学び合いの風土をつくる。

② 振り返りをさせる

授業や単元の中で、自分の到達度を振り返らせ、それを踏まえて次の目標設定と、そのためにすべきことを考えさせる。

*角屋教授提供資料を基に編集部で作成。

やり直す」という2点です。朝・昼・夜と1日3回書く、一度覚えたものを1週間後・1か月後・3か月後に見直すといったように具体的な方法を示しましょう。学力に課題がある子どもは、この「すべ」を知らないために効果的な学習ができず、知識・技能が身につけていないことが往々にしてあるからです。

ここで気をつけてほしいのが、子どもへの声のかけ方です。もし1つしか覚えてこなかったとしても、「たった1つだけ?」ではなく、「よく覚えられたね」と褒めてください。他者に認められることは、自信と有能感をもたらします。そして、1日1個でも自分が決めた目標を達成して、自分の成長や変容を実感することは、次の学習への意欲につながります。その繰り返しによって、知識・技能は身につけていくのです。また、一度覚えたことを忘れてしまっても、「なぜできないの」と否定せず、「やり直せばいいよ」と励ましてください。忘れるのは当たり前で、繰り返していくことが教育なのです。

こうした指導を学力に課題を感じていたある学校で実践したところ、「全国学力・学習状況調査」のA問題

で正答率が大幅に上昇しました。

学びに向かう力 ● 指導のポイント

友だちのよい点を学び合うまねのできる学級づくりを

最後は、学びに向かう力の「すべ」についてです。

学びに向かう力を持つ子とそうでない子を比べると、前者は「学習の目的」と「それを達成するための手段(すべ)」を持っていて、逆に後者は、何をすればよいのか分かっていないことが多いようです。そうであれば、できている子が実践している方法をまねることから始めればよいのではないのでしょうか。優れた人の考え方や行動、手法を模倣することは、効果的な学習方法の1つであり、自分を高める第一歩となります。

そうすると、学級の中に「まねされる側」と「まねる側」の階層ができてしまう心配が出てきますが、ここで重要となるのが学級づくりです。教員が子ども一人ひとりの長所に光をあて、人それぞれに価値があると、違いを肯定的に受け止められる姿勢を育むことが大切です。他者とかかわり合うことで自分がよりよく変容

図4 単元・授業の構成例と声かけ例(5年生の「振り子の運動」の例)

構成例	声かけ例
① 問題を見いだす ・ 2つ以上のものを提示し、比較して違いに気づかせる。 (例) 振れが速い振り子と振れが遅い振り子の動きを子どもたちに観察させる。	先生 何がどのように違うかな? NG「どのように思う?」 子ども 振れが遅い方は糸が長く、重りが重い。振れが速い方は糸が短く、重りが軽い。
② 見通しを持つ ・ 予想を持たせるために、考える範囲を限定させて、子どもが発想しやすいようにする。	先生 何がそのような違いを生じさせているのかな? NG「なぜこうなるの?」 子ども 2つの振り子を比べると、糸の長さが異なっている。だから、糸の長さが振れの速さに関係すると思う。
③ 解決方法を考える ・ 既習事項と関係づけ、類推などをさせて解決方法を発想できるようにする。	先生 今までに学んだことを用いて調べる方法はないかな? NG「解決方法を考えてみよう」 子ども 植物の成長の条件を調べる時に、調べる条件だけに注目し、それ以外の条件をそろえて比較する実験をしたので、同じようにして調べてみたい。
④ 解決方法を実行する	
⑤ 結果を評価する ・ 予想と結果を比較して一致・不一致を整理したり、目的と関係づけたりして、何が分かったのかを明確にさせる。	先生 実行した結果を、条件を基に整理してみよう。 NG「どのような結果が得られたかな?」 子ども 糸の長さが長いと振れが遅く、糸の長さが短いと振れが速い。 先生 実験結果と予想した結果を比較すると、どのようなことが言えるかな? NG「何が言えるの?」 子ども この実験結果は、糸の長さが振れの速さに関係するという予想と一致した。
⑥ 活動を振り返る ・ 問題が解決できたのが、①～⑤を目的に照らし合わせて振り返り、整合性がなければ、それが次の課題になる。整合性があれば、その性質や規則性を確認させ、知識・技能を確実に獲得させる。	先生 今日の学習から、何が解決できて、何が解決できていないのかな? NG「何が分かったの?」 子ども 今回の実験は糸の長さを変えて振れの速さの違いを調べただけなので、その他の条件を変えて振れの速さの違いを調べる必要があると思う。

*角屋教授提供資料を基に編集部で作成。

できると実感させることが、学び合いの風土づくりに結びつきます。

特に、小学校低学年はまねをすることが好きですから、人の話をきちんと聞く姿勢を身につけさせましょう。そうすることで、安心して発言できる場を築くことができ、学び合いの

効果をより引き出すことができます。低学年から学び合いのよさを経験すれば、中学年以降の学びの質にも大きな影響をもたらすでしょう。

さらに、1コマの授業や単元の中で、授業の目標に照らして自分がどこまでできたのかという振り返りを

させることも重要です。その上で、次の目標を設定させ、そのために何をすべきかを考えさせることが、次への学習意欲につながります。

これら「すべ」を育む授業の流れと声かけの例をまとめたのが図4です。このような探究的な学びは、すべての授業で実現できるものではありませんが、適切な題材を選んで単元の中に組み込み、子どもが「すべ」を用いる場面を意識した授業にしていってください。

教育委員会へのアドバイス 「すべ」にまで落とし込んだ授業モデルを学校に示す

授業改善に向けては、ここまでお話ししたような「すべ」を子どもたちがつかむために、先生方が目指す授業を実現できるよう支援することが大切です。教育委員会では、各校に向けて「すべ」にまで落とし込んだ授業モデルを示せているかどうか、今一度見直してみてください。

私が授業研究でかかわっている川崎市立東菅小学校では、ベテランの先生が2年の年月をかけて授業を大きく変えることができました(P.14～17参照)。「すべ」を言葉としてはすぐに理解できても、具体的に授業に落とし込むまでが大変です。東菅小学校のケースでは、授業を変えて子どもに変容が見られたことで、コツをつかんでいったようです。

授業は、子どもの変容=成長を目指して行うものです。よく「主体的・対話的で深い学び」の「『深い学び』とは何か」が議論されますが、私は授業前と授業後の子どもの様子を比較して、どれだけ変容があったかが「学びの深さ」につながるのだと考えています。先生方には、そうした子どもたちが変容する授業をぜひ目指していただければと思います。

ICTを活用した新たな学びで、 多面的な資質・能力を育む

福島県新地町

ICTを活用した先進的な教育活動が全国的に注目されている福島県新地町。2011年の東日本大震災で大きな被害を受け、その後、復興が進む中で、教育が地域の支えの1つとなることを目指し、ICTを活用した教育に取り組んだ。2014年度からはクラウド環境を活用した新たな学びの研究を進め、子どもたちに変化の激しい社会を生き抜くための資質・能力を育てている。

福島県新地町 プロフィール

◎福島県の太平洋岸最北部に位置する。原始時代から人々が生活し、新地貝塚や三貫地貝塚などが残る。東日本大震災での被災後、沿岸部集落の高台移転が進められ、跡地を防災緑地等に整備している。

人口 約 8,300人 面積 46.53km²
公立学校数 小学校3校、中学校1校 児童生徒数 685人
電話 0244-62-4477
URL <https://kyoiku.shinchi-town.jp/>

新地町教育委員会の施策

授業や家庭学習でICTを活用し、 3つの学びで確かな学力につなげる



教育長 佐々木孝司 ささき・こうじ

福島県立高校教諭、福島県教育庁勤務等を経て、教育事務所長を歴任。退職後、法人福島県病院協会事務局長を経て、2013年から現職。



指導主事兼
社会教育主事
伊藤 寛
いとう・ゆたか

新地町立尚英中学校教諭を経て、2015年度から現職。学力向上、ICT活用教育、特別支援教育、いじめ・不登校を担当。

施策の概要

復興の支えとして、 ICTを活用した教育に着手

以前から子どもの学力に課題が見られた新地町では、2010～11年度にかけて全小・中学校に電子黒板や1人1台のタブレット端末を配置した。その活用を進めようとした矢先、2011年の東日本大震災で町の3分の1が津波の被害を受け、一時は教育活動すら困難な状況となった。佐々木孝司教育長は、次のように語る。

「被災の傷跡は今なお深く、住民の心は癒えていません。そうした中、教育が人々の心の支えの1つとなるよう、子どもの将来を見据えた教育活動を展開してきました」

大人も落ち着かない状況で家庭や地域の教育力が低下する中、佐々木教育長は2013年の着任以来、校庭の整備や食育に注力して子どもの生活や心の安定を図るとともに、ICTの

本格的な活用に着手。ICT担当の指導主事を1人増員したほか、ICT支援員を常勤で各校2人配置し、デジタル教科書の活用やタブレット端末の持ち帰り学習などを開始した。

さらに、2014年度からは、クラウド環境を活用した新たな学びのあり方の研究を進めている。育みたい資質・能力を「21世紀の社会を生き抜く力」と定義し、それを実現するための学びとして、「新地町ICT活用グランドデザイン」を策定(図1)。
①個々に応じた学び、②主体的・協働的な学び、③探究志向の学びの3つを柱とする教育活動を町内の全小・中学校で展開している。

具体的な取り組み

習得・活用・探究それぞれに対応した3つの学びを展開

まず、学力の土台となる知識の定着を図る「個々に応じた学び」とし

て、ドリル学習型コンテンツが入ったタブレットとWi-Fiの持ち帰り家庭学習を行っている。主に単元導入や習熟の場面で活用し、学び直しから発展まで幅広く問題が選べることから、各自の状況に応じた学習が可能だ。伊藤寛指導主事は、ほかにも次のような利点があると話す。

「クラウド環境を活用して、教員が子どもの学習状況を把握できるため、家庭学習で内容の理解が十分であれば、次の授業ではより難しい課題を設定し、不十分なら既習事項の復習から始めるなど、学習内容の最適化にも活用しています」

子どもが授業の動画を持ち帰り、家庭で復習する試みも始めた。

「保護者と一緒に動画を見て、コミュニケーションの機会を増やしてもらうことで、家庭の教育力の回復も目指しています。また、家庭学習時間が増え、テレビの視聴時間やスマートフォンの使用時間が減るなどの効果も表れています」(佐々木教育長)

「主体的・協働的な学び」でも、タブレットを活用している。事前課題

を提示し、各自が家庭で考えてタブレットに書き込んだ意見を教員が授業前に確認。話し合いを通して考えを広げたい時は異なる意見の子ども同士で、考えを深めたい時は同じ意見の子ども同士で班を組ませるなど、学習方法でも最適化を図っている。

「以前は授業で課題を示していましたが、5～10分で考えを深めることは難しいと思います。家庭の中でのリラックスした状態でこそ、課題についてじっくり考えることができ、授業での話し合いを深めることができるのです」(伊藤指導主事)

授業中はタブレットの協働学習支援ツールを活用して、複数の子どもの画面を映し出して比較したり、複数の子どもが1枚のシートに同時に記入したりして、思考を深めている。また、シンキングツールを思考過程の可視化や整理に役立てている。

「探究志向の学び」では、例えば校外学習前にグループで疑問を整理して質問を吟味し、体験後に成果をまとめるなどの学習を展開している。

「社会に出て新たな課題に直面した

際には、仲間とともに協力して解決方法を考え、生み出す力が必要です。そうしたプロセスを学校の中で経験させています」(伊藤指導主事)

なお、「主体的・協働的な学び」や「探究志向の学び」では、ルーブリックを用いた評価を導入している。

「授業の最初にルーブリックを提示することで、子どもに授業の見通しを持たせています。到達目標が明確になれば、評価への納得感も高まります。2年かかってようやく浸透してきました」(伊藤指導主事)

成果

学力の伸びとともに子どもたちに自信がついた

年を追うごとに、子どもの学力は向上している。「全国学力・学習状況調査」の結果を見ると、小学校では以前、国語・算数ともに全国平均を下回っていたが、現在はA・B両方の問題で平均を上回るようになり、特にB問題で顕著な伸びが見られた。

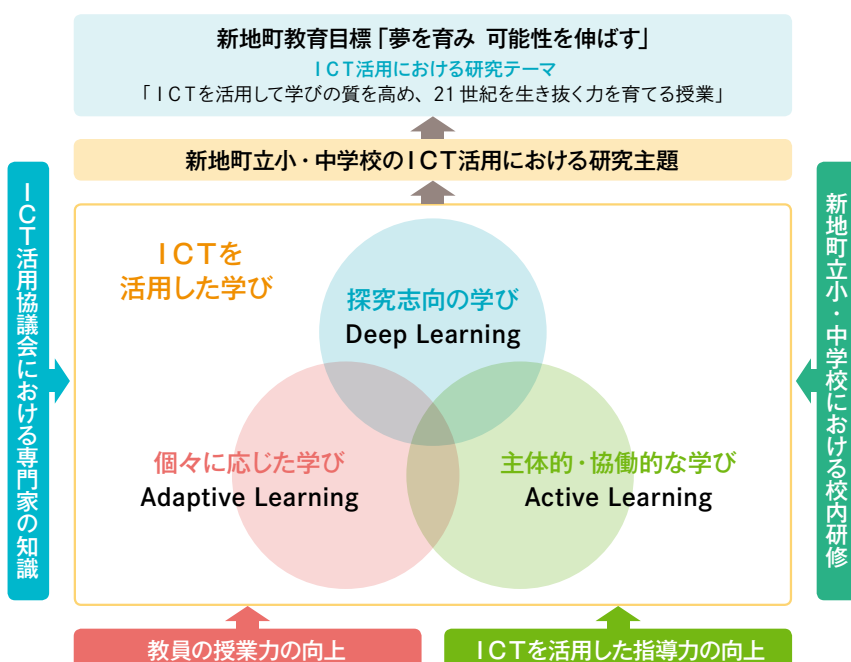
これまで受け身だった子どもたちが、今では外部から視察が来ても、自信を持って話し合い活動に取り組み、堂々と発表できるようになったことも成果の1つだ。

さらに、これまでICT活用を通じて育ててきた資質・能力を検証するため、2017年度から新たにベネッセのGPS-Academic* (以下、GPS)を中学校に導入している。

「GPSを通じて、学力調査等では測れない資質・能力を可視化し、評価したいと考え、導入しました。他の指標と合わせて分析することで、指導にも生かしています」(伊藤指導主事)

例えば中学校のある学年では、GPSの結果は高かったものの、他学年に比べて学力調査や読解力テストの結果が低かった。ここから、「主体的・協働的な学びなどを通して思考力は

図1 新地町ICT活用グランドデザイン



*新地町教育委員会提供資料を基に編集部で作成。

* ベネッセの教材の1つ。問題発見・解決に必要な3つの思考力(批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力)を選択式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。

高まったが、読解力が低く、問題文の理解が不十分だったことが、学力に影響を与えている」という課題が明らかになった。GPSは次年度以降も検証に活用し、町全体の学びの質を高めていきたいと考えている。

展望 単元構成を意識した授業で「つながる学び」を目指す

2017年度は、これまでの実践を振り返るとともに、「つながる学び」を重視した研究を進めている。

「単元を見通して、3つの学びがそれぞれどこに適しているかを検討し、学びをつなげることを、先生方にお

願いしています」(伊藤指導主事)

授業改善を意識させるため、町教委では「新地町授業診断シート」(図2)を各校に提示し、授業づくりに生かしてもらっている。授業中だけでなく、学級経営や授業準備なども重視しているのが特徴だ。

また、今後3年間をかけて、文部科学省・総務省の事業として、学習系データと校務系データを連携させるシステムを構築するなど、ICT活用のさらなる高度化にも着手している。

さらに、同町では毎年11月に「ICT活用発表会」を開催し、ICTの普及活動にも熱心に取り組んでいる。

「地域の復興に向け、教育に何ができるのかを考え続けていくとともに、

ICTを活用した教育を全国に広げていきたいと思います」(佐々木教育長)

図2 「新地町授業診断シート」(抜粋)

このシートは先生方が日々の授業を振り返り、校内研修の充実を図るために作成しました。実際に応じて項目を絞る、変更の視点を変えるなど工夫してご利用ください。

授業の実践前に以下の①、②の視点で確認し、評価の低いところは改善しましょう。

① 教室の様子

1	席間でもよいという雰囲気中で、安心して発言できる空間になっている	C	B	A	B
2	席間でのみ発言できず、席間でも発言できるような声かけが、疑問や質問が来るまで待つ余裕が確保されている	C	B	A	B
3	自分の言葉が伝わるために、発言や発表を促し、発言を促した場面になっている	C	B	A	B

② 授業の前

1	形式(議題)の構想を明確にし、学びが達成された状態を自ら評価できる状態にしておく	C	B	A	B
2	学習内容に合った学習活動や教材の活用を計画し、内容理解がしっかりできるように工夫した教材の準備がなされている	C	B	A	B
3	本時の学びの目標を、難易度の異なる学習活動に分解し、学習の進捗を確認し、具体的な学習活動について決定している	C	B	A	B
4	授業を振り返るための振り返り学習で、授業にまつ「考えの創出や発見の機会」を必ず確保し、「学習内容の定着」が図られている	C	B	A	B

授業の実践後に以下の③、④の視点で振り返り、次の授業の参考にしましょう。

校内研修で活用する場合は⑤、⑥の授業者の自己評価も加えて協議をおこなってください。

③ 教室で

1	子どもの「問い」が「問い」になり、学びが深まると感じている	C	B	A	B
2	子どもが主体的に発言できるような声かけや、一人一人の発言・発表の準備が整っている	C	B	A	B
3	授業の振り返りや定着のための学習活動がある	C	B	A	B
4	子どもの学びに合わせた多様な学習活動を組み立てている	C	B	A	B
5	「考える」機会を「考える」機会に活用し、学びが深まると感じている	C	B	A	B
6	子どもが主体的に発言できるような声かけや、一人一人の発言・発表の準備が整っている	C	B	A	B

④ 授業後

1	子どもが主体的に発言できるような声かけや、一人一人の発言・発表の準備が整っている	C	B	A	B
2	子どもが主体的に発言できるような声かけや、一人一人の発言・発表の準備が整っている	C	B	A	B
3	子どもが主体的に発言できるような声かけや、一人一人の発言・発表の準備が整っている	C	B	A	B
4	子どもが主体的に発言できるような声かけや、一人一人の発言・発表の準備が整っている	C	B	A	B
5	子どもが主体的に発言できるような声かけや、一人一人の発言・発表の準備が整っている	C	B	A	B

*新地町教育委員会提供資料をそのまま掲載。

新地町立尚英中学校の実践

ICTを活用して、学び合いや表現の場面を多くし、主体的に課題解決に向かう生徒を育てる



© 1965 (昭和 40) 年創立。ICTを活用した教育活動が評価され、2015年度、日本教育工学会(JAET)より「学校情報化優良校」の認定を受けた。

校長 星 健一先生
 生徒数 249人
 学級数 11学級(うち特別支援学級2)
 電話 0244-62-2052
 URL https://kyoiku.shinchi-town.jp/?page_id=20

町の施策を受けた取り組み ICTを活用した指導で 思考力と主体性を育む

町内唯一の中学校である新地町立尚英中学校は、2011年度に町の施策でICT機器が整備された後、東日本大震災による被災から徐々に落ち着き始めた頃から、ICTを活用した指導を本格化させていった。ICT機器の扱いに慣れていない教員もいたため、当初は活用に戸惑いも見られた

という。星健一校長はこう振り返る。

「まずは比較的扱いやすいデジタル教科書や書画カメラを活用し、分かりやすい授業づくりを目指しました」

同校の生徒は、素直で何事にも一生懸命だが、おとなしく、受け身でシャイな傾向があった。また、根拠を基に自分の考えをまとめ、発表することへの苦手意識も見られた。そこで、2016年度には「自ら考え、主体的に学習する生徒」の育成を目指し、ICTを活用して思考を深め、表現す

る場面を多く設けるとともに、「教え込む学習」から「生徒に気づかせ学ばせる学習」への転換が図られた。

授業づくりの工夫

ICTを効果的に取り入れ 生徒主体の授業に転換

では、ICTを活用した同校の具体的な取り組みを見ていこう。

まず、「個々に応じた学び」では、ドリル学習型コンテンツを宿題に課して授業内容の定着を図った。習熟度に応じて、下の学年の既習事項を確認したり、予習として先取り学習に取り組んだりする生徒も見られた。また、家庭学習では、専用のSNSに生徒が質問を書き込むと、教員が直接答えたり、次の授業で解説したりする仕組みも設けている。

「主体的・協働的な学び」でもICT

を大いに活用。協働学習支援ツールを入れたタブレット端末を使用して、デジタル教科書や電子黒板を使った一斉授業中心から、生徒主体の話し合いを取り入れた協働学習中心の授業へと転換していった。

例えば、2年生理科の「動物の生活と生物の変遷」では、単元のまとめとして、動物の系統樹上に分類しづらいカモノハシの分類を学習課題として提示した。あらかじめタブレット端末にカモノハシの写真や動画を入れておき、生徒はそれを手がかりにして分類学上の特徴を探し、自分の考えと根拠を書き込んだ。そして、班で話し合っただけで発表資料を作成し、各班が電子黒板を使ってプレゼンを行った。

その際、授業の冒頭でルーブリックを示したが、Sレベルをあえて空白にした(写真1)。その理由を理科担当の原理沙先生は次のように語る。

「Aレベルを超えるためにSレベルでは何が必要なのかを生徒に考えさせ、話し合いでその内容を決めました。そうすることで、生徒は見通しを持ってより主体的に取り組むようになったと思います」

「大気の動きと日本の天気」の単元でも、同じ手法でタブレットに様々な気象情報を入れておき、それを基にして生徒に「明日の新地町の天気」を予想・発表させた(写真2)。

「探究志向の学び」の例としては、音楽科の授業で、生徒が振り返りと学び合いで歌唱力を高めていった取り組みが挙げられる。まず、生徒同

士で互いが歌う場面をタブレット端末で撮影し、歌声や表情など様々な角度から振り返りと自己評価を行った。さらに動画を見せて他の生徒や教員から助言を得ながら、より高いパフォーマンスを目指していった。

これらの実践に向けて、同校では研修体制も充実させている。毎年4月には、異動者向けに校内でICT活用研修を実施。また、岐阜女子大学の久世均教授の指導を受け、ICTを活用した授業改善の視点を学んだり、関西大学の黒上晴夫教授の指導の下、ルーブリックを活用した授業や評価について学んだりした。

また、ICT支援員も、ICT活用には欠かせない存在だ。研修主任の田野入秀浩先生は次のように語る。

「最初は機器整備の支援が中心でしたが、教員が機器の扱いに慣れてくると、教材や動画の作成をお願いしたり、授業内容を相談したりするようになり、今では授業づくりのアドバイザーと言える存在になりました」

成果と展望

主体性や表現力が著しく伸びる

授業形態の転換に伴い、教員の意識は大きく変わった。特に生徒に任せる場面が圧倒的に増えたという。

「生徒が自分の考えを表すのが苦手なのは土地柄だと思っていましたが、考えをまとめて発表する機会を増やせば、どの生徒もしっかり発表でき

ることに気づきました」(田野入先生)

実際、生徒たちは発表が上手で、抵抗感がない。ICTスキルも向上し、ツールとして自然に使えるようになり、発表の際にもICTをうまく使いこなしている。また、授業で発表資料を作成する際には、ストーリー性を持たせたり、起承転結をつけたりと、他者に分かりやすく伝える表現力の高まりも見られる。

また、教員があまりアドバイスをしなくても、自ら実験方法を設定して動くなど、課題解決の見通しを持って学べるようになりつつある。

2017年度に初めて受けたGPSの結果も良好だ。今後はGPSで協調性に苦手意識が見られた生徒に対して個人面談を通してアドバイスをを行うなど、一人ひとりを支援することに活用していきたいと考えている。

「これまで自尊感情や表現する力に課題がありましたが、一連の取り組みを経て、しっかり育ってきている手応えを感じています。今後もICTを有効に活用して21世紀を生き抜く力を育てていきたいと思います」(星校長)

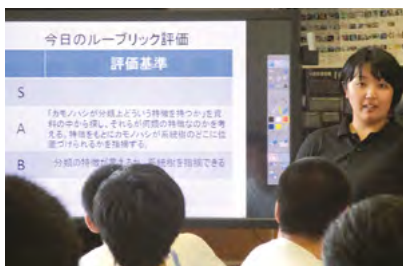


写真1 ルーブリックはすべての授業ではなく、単元のまとめなど効果的な場面で作成・提示するようにしている。



写真2 資料を参照したり、グループで考えを共有したりと、授業の様々な場面でタブレット端末を活用。一方で自分の考えや根拠はワークシートに整理するなど、アナログ教材も重視している。



校長

星 健一

ほし・けんいち

専門は理科。「仲間とともによりよい提案をし、それに向けて挑戦ができる生徒を育てたい」



教諭

田野入 秀浩

たのいり・ひでひろ

研修主任。技術・家庭科担当。「生徒のつぶやきを大事にした授業づくりを心がけたい」



教諭

原 理沙

はら・りさ

特別活動主任。理科担当。「身近なことに疑問を持ち、とことん追究する生徒を育てたい」

「油中サイクル」とキャリア教育で、学力とともに協働性や課題意識を育む

宮崎県 日南市立油津中学校

生徒の基礎学力の定着や積極性などに課題が見られた日南市立油津中学校では、2014年度から「分かる授業」を目指して、授業と家庭学習を連動させた学習サイクルの確立や、良好な人間関係づくりに基づく学び合い活動に力を入れてきた。2017年度はさらに、そこで出た課題を踏まえて、生徒が自ら「問い」を持って主体的に課題を追究するキャリア教育を進め、その成果を教科学習に生かそうとしている。



◎ 1947（昭和22）年開校。太平洋に面した油津港や再生した油津商店街に隣接する。学校経営目標は「今日が楽しく明日が待たれる学校」。

校長 山元俊朗先生
 生徒数 181人
 学級数 8学級（うち特別支援学級2）
 電話 0987-23-1149
 URL <https://cms.miyazaki-c.ed.jp/4202/hdocs/>



校長
山元俊朗
 やまもと・としろう

中学校国語科教諭、教頭を経て、現職。



教頭
三樹浩二
 みつぎ・こうじ

中学校社会科教諭、主幹教諭を経て、現職。

授業づくりの工夫

「分かる授業」を目指して各教科で学習の流れを統一

生徒の学力に課題のあった日南市立油津中学校では、2014年度に宮崎県「宮崎の子どもの学力を伸ばす総合推進事業」の指定校となったのをきっかけに、基礎学力と思考力・判断力・表現力のバランスのよい育成を目指した授業改善に着手した。

その柱は、「油中サイクル」に基づく授業づくりだ（図）。山元俊朗校長は次のように説明する。

「どの生徒にも『分かる授業』の実現を目指して、板書や掲示方法など、必ず取り組むべき方法を決め、全教科で授業の流れを統一しました」

特に重視したのは、その日の授業の「問い」と「答え」を明確にすることだ。授業で何をすればよいか生徒に見通しを持たせるため、授業の冒頭に学習課題を示し、最後には、授業で分かったことを生徒代表に発

表させるとともに、各自にも自分の言葉でまとめさせ、教員がそれを確認するようにした。分かったことがまとめにくい場合は、「アシストボード」でヒントを提示している。

また、思考力・判断力・表現力の育成を目指し、学び合い活動の型を「意見交換型」「共同作業型」など5つに整理した上で、各教科で積極的に取り入れていった。

「話し合いをしても、生徒たちが良好な関係でなければ、考えは深まりません。そこで、以前から生徒指導の一環として推進してきたピア・サポートやNCP（日南コミュニケーションスキルプログラム）を、学び合い活動を進めるための人間関係づくりに生かすことにしました」（山元校長）

具体的には、年間5時間、学活の時間を使って、上手な話し方・聞き方や頼み方・断り方など、円滑なコミュニケーションのためのスキルを学ぶ。ほかにも、「行ってみたい都道府県」などのテーマに合わせて自由

に話す「シャベリカ」や、ある生徒が「1分間スピーチ」を行い、それを聞いた生徒が「ありがとうカード」を返すなどの活動を行っている。

家庭学習の指導では、教科ごとにその日の授業内容を振り返り、重要だと思えるものを自分なりにまとめ直す「がんばりノート」（図）を導入した。三樹浩二教頭はこう説明する。

「教科書やノートを見返す過程で、学習内容の定着が図れると考えました。実際に取り組んでみると、エッセンスを要約する力も求められるため、思考力もかなり高まったと感じます」

授業づくりの成果と課題

学力が伸び、学校が落ち着く一方、いくつかの課題が残る

こうした取り組みを続けたところ、

家庭学習習慣や基礎学力の定着、学級づくりで一定の成果が見られた。例えば、文部科学省「全国学力・学習状況調査」では、「家で学校の授業の復習をしている」の肯定率がほぼ100%で、学力も学年を追うごとに伸びを見せている。

また、思いやりがあり、配慮のできる生徒が育ち、学校全体が非常に落ち着き、行事でもクラスでまとまって行動するなど、人間関係も良好だ。他方で、達成感や自己肯定感が低く、学習課題の設定方法にまで手が回らなかったことが課題として残った。

「自ら『問い』を立てると、生徒は意欲的に学びます。そして、それを自力で解決する経験を通して、達成感や自信につなげたいと考えました。そこで、課題を自分事として考えを深めていきやすいキャリア教育の充実を図ることにしました」(山元校長)

キャリア教育の実践と展望

自ら「問い」を立てることで思考力や表現力を育む

2016年度は教員の異動が多かったため、「油中サイクル」の定着を再度図り、2017年度に「総合的な学習

の時間」を活用したキャリア教育に着手することにした。生徒に社会へ飛び込ませ、地域の人々との出会いを通じて価値観を広げさせるという活動で、全学年合同で取り組んでいる。

「地域には、輝いている人が大勢います。そうした身近な大人と出会った感動を、他者に伝えさせたいと考えました」(山元校長)

まず、生徒の中に「問い」を生み出すため、様々な活動を行った。

「問いを持つことの大切さや問いのつくり方を、生徒全員で学習しました。対比することで、当たり前だと思っているところにも実は問いがあることに気づかせました」(三樹教頭)

また、日南市長や油津商店街の再生を手がけた木藤亮太氏を招いて、地域の現状と課題を語ってもらい、生徒に自分も地域の一員だという当事者意識を持たせた。

次に、全校生徒を縦割り16班に分け、担当教員とともに班ごとに話し合い、そこで出た問いを基に、学びたいことや訪問先を検討していった。そして、各班で計画を立て、夏休みに企業などを訪問。例えば、山元校長が担当した班は、「なぜ市内に10社以上のIT企業があるのか」という疑

問から、そのうちの1社を訪ね、IT企業の仕事内容を詳しく学んだ。

また、三樹教頭が担当した班では、大学生が起業したゲストハウスを訪問し、「どうして大学生が起業できたの?」「資金は?」などの疑問を投げかけた。大学生からは「何となく過ごしてはだめ」「これからは語学力やコミュニケーション力が大切」などの熱いメッセージをもらい、生徒たちは触発された様子だったという。

その後、現役の新聞記者から指導を受けながら班ごとに本格的な壁新聞を作成。10月の文化発表会で集大成となるプレゼンを大勢の前で行う。

「これまで表現することに苦手意識を持つ生徒が多く見られましたが、今回の経験を糧に表現力が高まることを期待しています」(山元校長)

今回の活動では、生徒たちは想定以上に課題意識を持って取り組み、さらに、今回の追究を踏まえて次の問いを立てる生徒も見られたという。これまでの活動を通して、生徒の思考力の高まりも見られ始めている。

「今年度、初めてGPS-Academic*(以下、GPS)を受検したところ、思考力の高まりが可視化でき、本校の取り組みがうまく行っているという手応えを感じました」(山元校長)

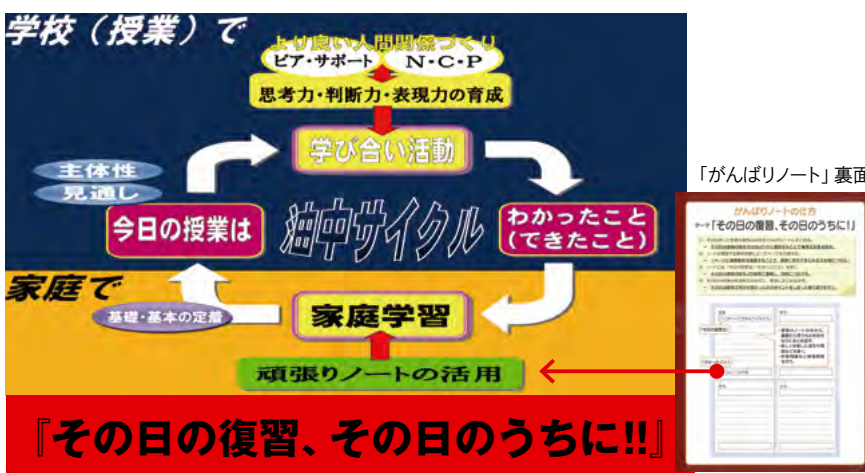
定期考査の結果が振るわない生徒でもGPSの結果が良好だったケースもあり、生徒の潜在能力が可視化できたこともよかったという。

「GPSは、本当の思考力が分かる問題だと実感しました。結果は生徒に伝えて自信を持たせたり、指導に活用したりしています」(三樹教頭)

今年度の後半は、キャリア教育で培った問いを立てる視点を、授業づくりに生かしていく予定だ。

「生徒の疑問を学習課題と重ねることで、生徒がより主体的に取り組めるような授業づくりを考えていきたいと思います」(山元校長)

図 「油中サイクル」と「がんばりノート」



授業では、最初に「今日の授業は」として学習課題を提示し、最後に「分かったこと」として生徒に発表させた内容をまとめる。必要に応じてヒントとなるキーワードを提示する「アシストボード」も活用する。これらは各教室に常備。「油中サイクル」の図は、各教室前方の左上に必ず掲示し、普段から生徒の目につくように配慮している。

*油津中学校提供資料を基に編集部で作成。

*「GPS-Academic」については、P.9参照。

「すべ」を取り入れた、子ども「主体」の授業で思考力を高める

神奈川県 川崎市立東菅小学校

明るく素直だが、児童の思考力を高める必要性を感じていた川崎市立東菅小学校では、2013年度から、角屋重樹氏をアドバイザーに迎え、「すべ」を取り入れた授業改善に取り組んでいる。研究の過程では、子ども同士の学び合いが思考を深めることを実感し、子どもの主体性を引き出す指導にも力を入れる。ベテラン教員も若手教員もベクトルをそろえて授業を見直すことで、子どもたちの思考力は確実に高まっている。



◎ 1970（昭和45）年開校。2014年度から川崎市教育委員会研究推進校「思考力の育成」、2016年度から同「理科教育研究」及び国立教育政策研究所の理科授業協力校の指定校。

校長 葉倉 朋子先生
 児童数 483人
 学級数 18学級（うち特別支援学級3）
 電話 044-944-2832
 URL <http://www.keins.city.kawasaki.jp/2/ke209101/>



校長
葉倉 朋子
 はくら・ともこ

川崎市立小学校教諭や川崎市総合教育センター指導主事、教頭を経て、現職。



総括教諭
村田 かほる
 むらた・かほる

4学年担任。元研究主任。2016年度、「文部科学大臣優秀教員表彰」を受賞。



教諭
米倉 史乃
 よねくら・ふみの

5学年担任。新任で同校に赴任して2年目。

取り組みの概要

子ども主体の授業で思考力や人間性を育む

4年生の算数で、かっこを用いた計算のきまりを学ぶ授業でのこと。ある児童が「Aさんが言ったことを言い換えると、 $70 \times 5 + 30 \times 5$ は、 $(70+30) \times 5$ と同じことだと思う」と発言すると、教室のあちこちから「そういうことか!」「何でそうなる

の?」といった言葉が飛び交う。そして、「前に習った等号の記号を使って説明すると…」と既習事項を基に説明しようとしたり、黒板に駆け寄って自分の考えを書いたり、それぞれが考えを表し始めた（写真1）。

そこで先生が「Bさん、納得できない顔をしているけど、どう?」と声をかけると、その児童は自分が理解できていない点を話す。すると、すかさず「こういうことだよ」と、ほかの子どもが説明し始める。

川崎市立東菅小学校では、このように子どもが自由に発言したり、前に出て板書したりという子ども主体の学びにより、思考力を育む授業が各教室で行われている。そのきっかけは、2013年度に校内研究の方向

性を検討するため、指導の実態と子どもの課題を整理したことにあった。葉倉朋子校長は次のように振り返る。

「当時は、教員が丁寧に教えて理解させる、いわゆる教え込みの授業が中心でした。一方で、子どもはおとなしく素直ですが、言い換えると、人の意見に流されやすく、思考力を高める必要性を感じていました」

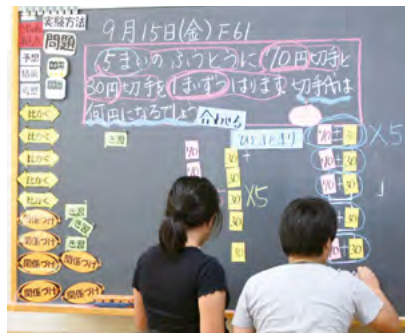


写真1 授業中、子どもは自由に発言し、前に出て板書もする。「Aさんの説明を聞きたい」と発言を引き出す言葉も多く聞かれた。そうした数々の発言を、教員は「Bさんが面白いことを言ったよ」などと整理しながら学び合いを方向づける。

東菅小学校の授業の様子を動画でご覧いただけます。

今回ご紹介した「すべ」を活用した授業の様子を2コマ分、動画でご覧いただけます。右のQRコードを読み取るか、ホームページ（<http://berd.benesse.jp/magazine/board/>）からアクセスしてご覧ください。



また、指導上の悩みとして、「話し合いが深まらない」「発言する子どもが偏る」「考えを引き出す発問が分からない」といった声も聞かれた。

そうした課題に基づき検討を進めた結果、教員だけでなく、子ども自身が「見通し」を持ち、「振り返り」をしながら、主体的に取り組める授業へと転換することで、思考力の育成を目指すことにした。

「自分自身を見つめる力や他者から学ぶ力、既習事項や経験を関係づけで問題を発見・解決する力の育成を重視しています。思考力育成の目標を考える中で、自己の成長や他者の存在価値を感じられる人間性も育みたいと考えました」(葉倉校長)

そのための授業づくりのアドバイザーとして、当時は国立教育政策研究所にいた角屋重樹氏(現・日本体育大学大学院教授)を招請。同氏の指導の下、毎日の授業に「比較」「関係づけ」「既習」「話型」という思考を促す4つの「すべ」を取り入れ、思考の方法を与える授業づくりに着手した。

研究過程と教員の意識の変化 2年かけて 子ども主体の授業へ転換

「すべ」を取り入れた授業は先行事例が少ないこともあり、当初は試行錯誤の連続だった。それでも1年ほど経つと、「比較」や「既習」の視点を取り入れることで児童が考える場面をつくりやすくなり、「話型」を活用させることで児童が自分の考えや根拠を言えるようになってきた。他方で、授業のどの場面でもどのように比較させると効果的かなどの課題が残った。

また、ベテラン教員ほど、授業を変えることに不安を抱く様子が見られた。教職歴の長い村田かほる先生は、当時を次のように振り返る。

「元々、学級経営は得意で、この授

業をやれば子どもたちはついてきてくれるという自負心もありました。授業を変えてしまうと、これまで積み上げてきた指導が崩れてしまうのではないかという怖さがありました」

実際、授業を変えたところ、子どもから意見が出過ぎてまとまらないといった課題に直面した村田先生は、角屋教授の指導とほかの教員からの意見で、思考を促す教員の話型を考えるようになった。

「実践を重ねるうちに、学習内容の本質を見極めて子どもの意見を類型化するなど、思考を整理して方向づけられるようになりました。子どもが活発に話していればよいわけではなく、子どもたちが主体的に授業を進めることが大切だと気づくまでに2年かかりました」(村田先生)

若手教員である教職2年目の米倉史乃^{ふみの}先生も、研究している「すべ」をどこで取り入れ、思考をどう整理すればよいか当初は分からなかった。

「最初は授業の重点を絞り切れず、何でも子どもに発表させて、板書していたため、子どもは何を焦点化すればよいか分からない様子でした。そこで、村田先生たちの授業を見てまねをしたり、ほかの先生方にアドバイスをもらったりしながら実践す

るうちに、比較には前時の学習内容などの『比較の基準』が必要であるということへの理解が進みました。それ以降は、頭の中をすっきり整理できるようになりました」

「すべ」を取り入れた授業① 「比較」「関係づけ」「既習」 3つの考える「すべ」を示す

実際にどう「すべ」を授業に取り入れているのか見ていこう(図1)。

◎「比較」で考える視点を明確化

同校が最初に取り入れたのが「比較」だ。これは、2つ以上の事柄を提示し、比べさせて類似点や相違点を見だし、問題や特徴に気づかせる「すべ」だ。例えば、5年生の国語では、教科書に出てきた北原白秋の詩とともに、別の詩を提示し、2つの作品を比較させることで、表現の工夫に気づかせた(P.16図2)。

◎「関係づけ」で解決の方向性を得る

「関係づけ」は、取り上げる内容を既習事項や日常生活などと結びつける「すべ」で、予想したり見通したりすることで、思考を深めることにつながる。例えば、4年生の理科「もののあたたまり方」では、児童自らが前時の実験と本時の実験を関係づ

図1 思考力を育てる学習過程

問題の発見	・比較・関係づけ	AとBの違いは何が関係しているのか。
見通しの設定	・経験・既習との関係づけ	前のあの考え方が使えそうだ。
見通しの実行	・思考の基盤を持つ ・比較の基準をつくる	視点を持つと考えやすい。 解決するには、比較の基準を決めるとはつきりするだろう。
実行の結果		
結果の考察	・見通しと結果を関係づけて考える	
解決方法の検討	・友だちの結果や考察・解決方法の検討をする。 方法との関係で考える。吟味する ・比較・関係づけ	友だちと自分が違う結果だということは、実験方法が違っていったのかな。
振り返りの設定	・自己の変容を意識する ・他者からの学びを意識する	前の自分の考え方と比べてみよう。 友だちの考えて使えそうなことは何か。

*東菅小学校提供資料を基に編集部で作成。

け、金属の特性に気づいた(図2)。

◎「既習」を意識させる

そして、様々な場面で生かせるのが「既習」だ。それまでの学習内容や経験を基にすることで学習の見通しが立てられ、「比較」の基準や「関係づけ」の対象にもなる。例えば、5年生の理科「もののとけ方」では、前時で実験した食塩の溶け方を基準に、ミョウバンの溶け方を比較させた。

当初は、児童が過去の学習内容をあまり意識していなかったため、教員は複数の既習事項を想起させ、「今日の授業にはどの既習が使えるか」という話し合いに時間をかけた。次第に児童は、授業がすべてつながっていて、既習を活用することの価値に気づいていったという。

「今は『既習』を用いて問題を解決する喜びを、毎回の授業で得られることを目指しています」(葉倉校長)

◎3つの「すべ」を意識させる工夫

これらの「すべ」を用いる際、教員は「比較」「関係づけ」などと書かれたカードを黒板に貼り、思考を焦点化させるようにした。次第に、子どもは教員の指示がなくても「比較」や「関係づけ」の場面に気づき、自分からカードを貼り出すようになった。「すべ」を体得した子どもたちは、自分の考えを説明し、ノートにまとめる際にも、自然と「比較」や「関係づけ」を用いている。

「無意識に行っていた『比較』や『関



写真2 子どもは考えに行き詰ると、教室に掲示された既習事項を見直して役立ちそうな内容を考える。「前の授業で勉強した〇〇を使うと…」といった発言も聞かれ、既習事項を強く意識して学んでいる様子が見えかけた。

係づけ』を『見える化』し、意識的にできるようにすることで、『学ぶ力』を高めていきました」(米倉先生)

教室には「既習」の内容を貼り、子どもが着想を得やすくしている(写真2)。最近では既習事項の中でも特に、学習の中心となるものを「思考の基盤」として授業を組み立てている。

「例えば、算数には様々な種類の計算方法がありますが、いずれも『まとまり』で捉えると考えやすくなります。子ども自身がそうした『思考の基盤』に気づくよう意識して指導するようになりました」(米倉先生)

「すべ」を取り入れた授業② 学級の実態に合う「話型」で 思考や表現を支える

「話型」は表現の「すべ」であり、言いたいことがあっても伝え方が分からない子どもが「話型」にあてはめることで発言しやすくなり、安心して話せるきっかけになるツールだ。また、比較や関係づけをしたり、友だちの発言を引き出したりと、様々な場面で思考や表現の支えにもなる。

話型には、「～と比べて」「～とつなげて考えると」「そのことを詳しく言うと」「つまり～です」「～と違っ

て(同じで)」など、思考を整理する話型、話し合いの話型、思考を促す話型(主に教員が使用)などがある。

例えば、4年生の理科の実験では、つなぐ乾電池を1つから2つに変えて豆電球がさらに明るくなったのを見て、ただ「明るくなった」と言うのではなく、「乾電池が1つの時と2つの時を比べると、2つの方が明るかった」などと比較の視点を持って発言するよう促している。

「『話型』は、型にはめるのではなく、学年が上がるにつれて自由度を高め、各担任が学級の実態に合わせて創るようになっています」(葉倉校長)

村田先生は、子どもが実際に使った言葉を基に話型を創っている。また、米倉先生は、「繰り返し使う中で、自分なりに肉づけをしているので、表現や思考がどんどん豊かになっています」と語る。

学びに向かう力の育成 学び合いや声かけの工夫で 子どもが「主体」となる授業に

2015年度からは、「話型」を基にして表現するための「聞いて、考えて、つなげる」指導にも力を入れている。

「『比較』や『関係づけ』ができて、

図2 「すべ」の活用例

5年生 国語 北原白秋の詩「からたちの花」 比較

◎作品における表現の工夫に気づかせるために、別の作者の作品と比較しながら読み進めた。作品単体の鑑賞ではなかなか意見が出てこなかったが、2つの作品を並べ、「どこが違う?」と発問することで、児童から「かたまり(連)の大きさと数が違う」などの発言が引き出せた。

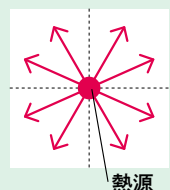
4年生 理科「もののがたまり方」 既習 関係づけ

◎前時に正方形の金属板の角に熱源を置いて熱する実験を行い、熱は近くから遠くに伝わることに気づかせた。本時には、熱源を真ん中に置いて熱が四方に広がる様子を観察させると、ある児童が「金属板を4つの正方形に切り離して考えたら、前に行った実験と一緒にだから温まり方も同じだ」と既習との関係性に気づいた。

前時の実験



本時の実験



*東菅小学校提供資料、取材を基に編集部で作成。

図3 思考力育成のための授業力を高めるカリキュラム・マネジメント「7か条」

- 1 授業改善をするのは、各担任や意欲的な教員だけでなく、**全教職員**。
- 2 授業改善をする時期は、授業研究の前後だけでなく、**日常的に行う**。
- 3 授業改善の方法は、各自の工夫だけでなく、**学校全体で共有した方法で工夫**。
- 4 授業改善の協議方法は、多様な視点で話し合うよりも、**明確な視点で話し合う**。
- 5 授業改善への助言者は、様々な講師よりも、**同じ講師に依頼（軸を1つにする）**。
- 6 授業改善への学習環境は、様々な工夫でなく、**授業改善の手立てと結びつけて工夫**。
- 7 学校予算の配分は、様々なことに平均的にではなく、**思考力育成に重きを置く**。

*東菅小学校提供資料を基に編集部で作成。

子ども同士が言葉をつなげて学び合わなければ、思考は十分に深まらなと気づきました」(葉倉校長)

そのため、毎年4～5月には、聞いて考えてつなげる力をつける指導をしている。そうした授業を土台にして、子どもの主体性が引き出されていくと、先生たちは実感している。

「子どもが『主体』となる授業を進めるようにしてから、仲間とともに考える学習が楽しいと話す子どもが増えていきます」(米倉先生)

子どもの主体性を引き出すため、声かけも工夫している。例えば、「この中ではAさんの答えが一番正解に近いね」と教員が正解を示すような発言ではなく、「みんなで考えを創り出そう」と一緒に考える姿勢を強調するようにしている。

「『この実験をやろう』から、『どんな実験が必要だと思うかな?』と発問を変え、判断を子どもに委ねることで、子どもは自分で学びを進めている気になります」(村田先生)

授業の課題も、子ども自身が見出し出していけるように工夫をしている。9月に行った5年生理科の授業では、米倉先生がちょうど週末に接近してきた台風に向けさせたところ、子どもの話し合いから「台風もほかの雲のように西から東へ移動するのだろうか」という課題が生まれた。

「教科書では、台風は夏休み前に学

習します。しかし、子どもたちが自分で課題を発見しやすくするために、あえて台風が多く発生する9月に台風について学習するようカリキュラムを組み替えました」(米倉先生)

このように、思考力育成の観点からのカリキュラム・マネジメントも算数や理科を中心に進めている。

研究体制の工夫

全教員がベクトルをそろえ「面」で子どもを育てる

同校の強みは、全教員のベクトルがそろっていることだ(図3)。

「共通の手立てを決めて、全教員が日常的に授業改善に取り組むことで、子どもも全体的に伸びていきます。手立ては共通ですが、工夫の仕方は各教員に委ねています」(葉倉校長)

毎年4月には、共通理解を図るための研究授業を実施。さらに、年6回の研究で全教員が授業を行う。葉倉校長はほぼ毎日授業を見て回り、「すべ」の育成を中心に教員にアドバイスし、研究の共有化とさらなる推進を図っている。また、研究協議会でも、各教員が指導の善し悪しでなく、今回の授業で自分たちが学べたことは何かという視点で協議している。

研究に取り組み始めてから、職員室で授業づくりについて日常的に話すようになったため、週1回の学年会

をやめ、恒常的に教材研究を充実させている。さらに、アドバイザーとして角屋教授の指導を継続して受けるなど、指導の一貫性にも配慮している。

成果と展望

学力、学習意識ともに4年間で大きく向上

授業改善の成果は様々な形で表れている。文部科学省「全国学力・学習状況調査」の結果を見ると、2013年度は全国平均に届くかどうかで、B問題が特に課題だったが、2016年度には国語・算数ともに上昇し、B問題は特に大幅な伸びを示した。質問紙調査の結果でも、国語・算数の授業理解や自己肯定感に関する質問への肯定率が、2013年度はいずれも平均を10ポイント前後下回っていたのが、2016年度はそれぞれ14～26ポイントもアップした。

卒業生の進学先の中学校からは、「理科の実験では、自分で課題を見つけて予想を立て、実験をしている」「やりたいことを積極的に提案してくる」との評価を得ている。また、保護者からは「夏休みも自分で課題を見つけて、どんどん解決しようとするようになった」など、同校の指導への肯定的な声が増えてきている。

これまでは単元を中心に改善を進めてきたが、今後は単元を貫くものを見極めつつ、学年内や学年を超えた単元間のつながりを見直すことが課題だ。さらに、教室の既習事項の掲示物をいつ外し、自分の力だけで考えさせるかについても検討していく。

「教員が各自の工夫を生かした取り組みを行い、互いに刺激して高め合ってきました。成果は上がりつつありますが、まだ発展途上だと捉えています。今後も生みの苦しみはあると思いますが、新しい学校文化を創造していきたいと思っています」(葉倉校長)

どうなる？

どうする？

道徳の教科化

教科化によって 授業をどう変える？

小学校では2018年度、中学校では2019年度から、「特別の教科」としての道徳科がスタートする。なぜ教科化されるのか、教科化によって何が変わり、学校や教育委員会はどうか対応すればよいのかを、今号と次号の2回にわたって取り上げる。まず今号は、中央教育審議会道徳教育専門部会委員として、道徳の学習指導要領の改正に深くかかわってきた東京学芸大学の永田繁雄教授に、道徳の教科化について解説いただくとともに、小学校での実践例を紹介する。

有識者インタビュー

私たち教員の意識改革と柔軟な発想で、 「考え、議論する道徳」の具現化を

東京学芸大学 教授 永田繁雄

教科化の背景

子どもの心の危機に しっかりと対応するために

道徳が「特別の教科」と位置づけられた背景には、大きく2つの課題があります。1つは、子どもの心の状況です。様々な調査結果から、子どもたちの自尊感情や生命に対する想像力、社会参画意識の不十分さが指摘されており、それがいじめや暴力行為などの問題行動にもつながっていると捉えられています。

このような子どもの心の危機に対し道徳の授業が必ずしも十分に伝えてこられなかったことが、もう1つの課題です。2013年に公表された文部科学省の道徳に関する報告書では、道徳の授業について忌避や軽視化の傾向が指摘されています。道徳教育の意義が十分に受け止められて

いないことから、授業の形式化・形骸化の傾向が見られたのです。それにより、子どもも授業を好きになれず、授業がさらに硬直化するという、負のスパイラルに陥っていました。そうした状況を打開するために、道徳教育の意義や可能性を見直して、魅力ある授業を行い、正のスパイラルに転換することが、今回の教科化の目的なのです。

なお、「特別の教科」とされたのは、中学校でも道徳専門の教員免許を設定せず、評価も各教科とは異なり独自の考えで行うからです。

教科化における変更点

「考え、議論する道徳」に向けて 内容・教材・指導方法を改善

道徳科は、2017年3月の学習指導要領の全面改訂に先んじて、2015



ながた・しげお 東京学芸大学大学院教育学研究科学校教育専攻修了。東京都内小学校教諭、東京都文京区教育委員会指導主事、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官を経て、2009年度から現職。中央教育審議会教育課程部会道徳教育専門部会委員、日本道徳教育学会副会長兼事務局長等を兼任。主な編著書に『小学校新学習指導要領ポイント総整理 特別の教科道徳』（東洋館出版社）、『道徳科』評価の考え方・進め方』（教育開発研究所）など。

年の一部改正の中で「特別の教科」として位置づけられ、その目標が次のように示されました。

「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己の（人間としての）生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」*1

このように、道徳科は、道徳教育が育む「資質・能力」である「道徳性」を直接的に耕し育む教育活動の要としての性格がより明確になり、一貫性のある指導が行いやすくなりました。

教科化による変更点として、大きく次の4つが挙げられます。

◎検定教科書の導入

これまでの道徳用副読本は「副教材」としての位置づけでしたが、「特別の教科」となったため、検定教科書を主たる教材として用いることとなります。教科書には、道徳のすべての内容項目を主題として網羅した教材が織り込まれています。

◎内容項目の見直しと体系化

指導内容は、いじめ問題への対応の充実を図り、発達段階を一層踏まえた体系的なものへと改善されました。例えば小学校では「個性の伸長」「相互理解、寛容」「公正、公平、社会正義」「国際理解、国際親善」「よりよく生きる喜び」の項目が学年段階に応じて追加され、小学校低学年は19項目、中学年は20項目、高学年と中学校は22項目となりました。

また、時代の様相を反映し、ESDや情報モラル教育、環境教育、キャリア教育など、今日的な課題への対応も求められています。

◎指導方法の工夫と改善

問題解決的な学習や体験的な学習など、指導方法を工夫することが求められています（詳細は授業づくり

のポイント参照）。

◎記述式による評価

数値による評価ではなく、子どもの成長の様子や学習状況を認め励ます記述式の評価を行うこととされています（詳細は次号で紹介）。

このようなポイントを押さえた授業を展開し、「考え、議論する道徳」を実現することが求められているのです。

授業づくりのポイント① 価値観の形成

授業で目指すのは、全員が自分の「納得解」を持つこと

では、次に、具体的な授業づくりのポイントを見ていきます。

まず、授業の目標は、他者との合意形成や1つの正解に集約すること以上に、一人ひとりの価値観の形成、いわば自分の「納得解」にたどり着けるようにすることが中心になると、改めて意識することが重要です。もとより生活・学習経験は一人ひとり異なり、生き方を支える価値観も多様です。他者とそれを交流し、自分なりの価値観を広げ、深めていくことが、道徳の授業のねらいなのです。

授業では「自分が納得できる答えを見つけてみよう」と声をかけ、考える意欲を引き出していくとよいでしょう。他者と切磋琢磨し合う授業を通して、一人ひとりの答えは自己の納得に向けて磨きがかかり、明確になっていくのです。

授業づくりのポイント② 指導方法の拡充

3つの指導方法を組み合わせ子ども思考を活性化させる

これまでの道徳の授業では、読み物での登場人物の心情を読み取るような学習が多く見られました。しかし、それだけでは「小さな国語」のような指導になりかねません。

そこで、文部科学省「『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について（報告）」（2016年7月）では、質の高い指導方法として3つの例が示されました（図1）。今まで多く見られた「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」に加えて、「問題解決的な学習」「道徳的行為に関する体験的な学習」を示し、それらを組み合わせた指導を推奨しています。

具体的に言うと、「問題解決的な学習」は、道徳的な問題や課題について、自己への問いかけを深め、議論する中で、自分なりの「納得解」を導き出していく方法です。そのためには、より大きな視点から発問を構想していくことが必要です。

例えば、物語の各場面について「～の時、Aの気持ちはどうだろう」「～ではどう考えただろう」といった時系列に考えさせる「場面発問」は、いわば各駅停車的な小さな発問で、それだけでは問題の追求にはなりません。むしろ、教材の持つ問題、「～にはどんな意味があるのか」「Aが

図1 「質の高い多様な指導方法」として挙げられた3つの授業イメージ

読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習	問題解決的な学習	道徳的行為に関する体験的な学習
教材の登場人物の判断や心情を自分との関わりで多面的・多角的に考えることなどを通して、道徳的価値の理解を深める。	問題解決的な学習を通して、道徳的な問題を多面的・多角的に考え、児童生徒一人一人が生きる上で出会う様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う。	役割演技などの疑似体験的な表現活動を通して、道徳的価値の理解を深め、様々な課題や問題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う。

*文部科学省「『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について（報告）」（2016年7月）を基に、永田教授が作成したものを引用。

*1（ ）内は中学校の目標。

大切にしていることは何だろう」「～はどんなことが問題なのか」といった主題や道徳的価値などに着眼した、いわば「テーマ発問」を織り込むと、子どもがより大きな視点で問題を追求するきっかけになります。

発問の大きさは、①「場面を問う（人物の気持ちや行為の理由など）」、②「人物を問う（主人公の生き方など）」、③「教材を問う（教材の意味や持ち味など）」、④「価値を問う（主題となる価値や内容など）」の順に大きくなっていきます。大きな発問ほど、一体的な問題追求の思考を生み出しやすくなるでしょう。

また、「道徳的行為に関する体験的な学習」は、役割演技や劇化、グループワーク、エクササイズなど活動的な手法を生かして、テーマの追求を深める方法です。道徳的行為や活動すること自体が目的とならないよう、学習過程に効果的に取り入れ、道徳的な問題について考えを深められるように促すことが大切になります。

この3つの指導方法は、それぞれが独立した指導の「型」を示すものではないとされています。それぞれの指導の要素を授業の主題や子どもの実態に応じて組み合わせ、先生方の柔軟な発想で多様な指導方法を生み出していきたいものです。

授業づくりのポイント③ 能動的な学び

子どもの問題意識と学ばせたい主題を重ね、主体的に追求させる

子ども一人ひとりが「納得解」を持つことができる授業にするためには、子どもの「主体的な学び」の実現が欠かせません。そのためには、子どもの問題意識が必要です。そこで、子ども自身から問いを生み出させるようにします。

例えば、教材を読んだ後に「どんなことが気になった?」「何を考えた

いと思った?」と発問したり、子どもの経験と結びつけたりします。この「子どもの問題意識」と「教員が学ばせたい主題」との重なりが大きくなればなるほど、学習テーマは鮮明になり、子どもの学習意欲は高まっていきます。

それと同時に、言語活動を生かした「対話的な学び」を通して、子どもの学びの空間を広げていくことも重要です。他者の考えに共感するとともに、互いに学び合うことを通して、道徳的な価値や生き方について深められるように促します。

このようにして、「主体的な学び」が「対話的な学び」によって広がることで、子どもは問題追求の能動的な学びをするようになり、「深い学び」につながっていきます（図2）。

授業づくりのポイント④ 思考を促す発問

発問の立ち位置を工夫し、「多面的・多角的」な思考を促す

「主体的・対話的で深い学び」を促す際に重要なのが、道徳科の目標でも触れられている「多面的・多角的」な思考です。その「多面的」と「多角的」の違いを意識して授業に生かすと、子どもの思考を促しやすくなります（図3）。

「多面的思考」は、1つの事柄について見る立場を変えたり、多くの人

の見方を生かしたりして、対比して掘り下げていく方法です。これは、いわば「みとめあい」の学びと言えます。一方、「多角的思考」は、1つの事柄について自分の考えや生き方の選択肢を主張し合ったり、話し合ったりして、より明確化する方法です。こちらは「みがきあい」の学びと言えます。

これらの思考を促す鍵は、発問です。例えば、発問をその立ち位置によって「共感的」「分析的」「投影的」「批判的」の4つに区分し、それを問題追求の視点に生かすことで、同じ題材でも子どもの見る視点が変わり、思考が活性化するはず（図4）。

教科化に向けた準備

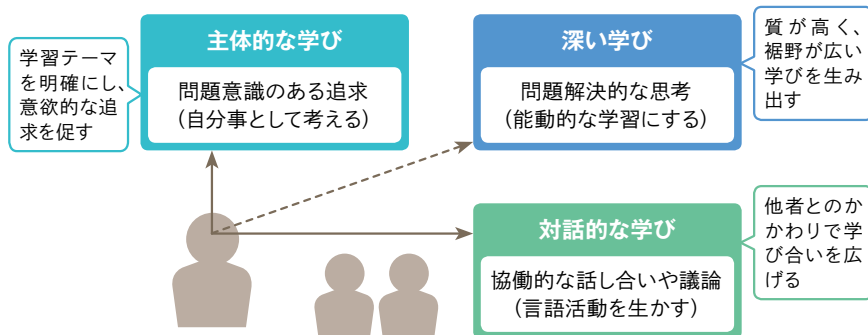
年度内の指導計画立案に向け、教育委員会が各校の支援を

◎各校における準備

2018年度に教科化が始まる小学校では、本年度の後半は使用する教科書の内容を吟味し、道徳教育の諸計画を整備する時であると言えます。

教科書は主たる教材としての使用義務がありますが、道徳科の特性に鑑みれば、地域素材や郷土資料など多様な教材をその一部に生かすことも大切であることが学習指導要領などに明示されています。例えば、地域の発展に貢献した名士の話や、環境問題などの現代的な課題、放送教

図2 「主体的・対話的で深い学び」の姿（考え方の例）



「主体的な学び」を縦軸、「対話的な学び」を横軸として捉えると、「深い学び」をつくり出す手法をイメージしやすい。
* 永田教授提供資料を基に編集部で作成。

材など、各校で独自かつ重点的に取り上げたい内容もあるはず。それらも含めて検討し、道徳教育の全体計画と道徳科の年間指導計画を立てていきます。教科書使用を進めつつ、年度途中で柔軟に計画を見直し、学校や地域の特色を織り込んでいく

という方法も考えられます。

また、授業の一部を学年の他のクラス担任や専科の教員が巡回しながら担当する方法も、道徳科の活性化に有効だとされています。

◎教育委員会の支援

各校の準備にあたっては、教育委

員会の支援も欠かせません。例えば、次のようなことが考えられます。

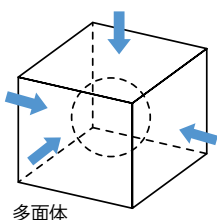
- ①学校としての道徳教育の方針を改めて明確化させる。
- ②道徳教育推進教師を中心とした指導体制を、学年部などの分掌も生かして整備することを促す。
- ③全体計画・年間指導計画作成に向けて、例えば、文部科学省や教科書会社等の発信情報などを整理して提供し、支援する。
- ④授業実践に関する研修会などで、指導改善や評価の仕組みをつくるためのモデルを示す。

まず教育委員会としての方針や方向性を固めた上で、各学校・各地域の課題に応じた準備を後押ししていただければと思います。

図3 「多面的・多角的」な思考とは? (考え方の参考例)

多面的思考 主として「みとめ(深め)あい」

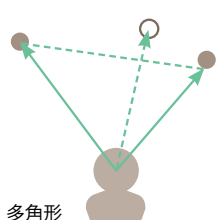
◎主に、1つの事柄(道徳的価値など)について、見る立場を変えたり、多くの人の見方を生かしたりして、対比させ合い、深め、掘り下げること。



主に、分析的思考

多角的思考 主として「みがきあい」

◎主に、1つの事柄(道徳的価値など)について、自己の考え方の主張や生き方の選択肢を他の人と対立させ議論し合うなどして、より明確にすること。



主に、選択的思考

*永田教授提供資料を基に編集部で作成。

図4 発問の立ち位置の4区分と、多面的・多角的思考(見方の例)

互いの考えの違いが大切にされる「みとめあい」の思考が多い

主人公の心情・考えを明らかにする
 人物・お話などの意味を明らかにする
 主として多面的思考



意見の対立やジレンマ・選択肢が強調される「みがきあい」の思考が多い

*永田教授提供資料を基に編集部で作成。

教科化に向けたメッセージ

教科化をチャンスとして、新しい指導のあり方を考える

道徳の教科化を機にまず求められているのは、教育に携わる私たち一人ひとりの意識改革だと言えます。子どもの伸びる力を信じて、子どもが生き方の選択肢を広げていくことができるように、柔軟で開発的な発想を持つことが重要です。

道徳教育は、教育全体に大きな力をもたらします。実際、道徳科の研究指定校の多くで、学力の向上が見られます。道徳教育の充実によって、教員がより子どもへの共感的な対応ができるようになり、子どもも自尊心を高め、自己の学び方や生き方を一層大事にするようになるからです。また、そうした子どもの変化を見て、家庭や地域の人々もその教育力を一層発揮するようになります。

道徳教育の持つ底知れない魅力と可能性を信じて、その活力を引き出すために、このビッグチャンスを生かしていきたいものです。

発問の工夫で多面的・多角的な思考を促し 一人ひとりを納得解に導く

埼玉県 越谷市立大沢小学校



◎ 1877 (明治 10) 年開校。教育理念は、「学校とは、子どもの尊い命と無限の可能性をあずかることである」。

校長 藤澤由紀夫先生

児童数 449 人

学級数 17 学級 (うち特別支援学級 4)

電話 048-974-8522

URL https://school.city.koshigaya.saitama.jp/osawa_e/

教科学習や特別活動など 教育活動全体で道徳性を育む

越谷市立大沢小学校は、生活面に課題が見られたことを機に、約30年前から道徳教育の研究に取り組んでいる。「道徳の時間」を中心に教育活動全体で道徳性を育む「総合単元的な道徳学習」を設置。全体計画を基に、各学年で重点化したい内容を年間テーマとして設定している。例えば、2017年度の6年生の年間テーマは、「自己を見つめ、生き方を考え、共に高め合える児童をめざして」とし、主に「自分自身に関すること」の領域に重点を置く。6学年主任の高橋健司先生は次のように語る。

「2016年度末に子どもの実態を話し合った際、主体性の弱さが課題に挙がりました。そこで、自ら考え行動する力を育むために、自分を見つめ直す機会を多く設けています」

学期ごとに指導計画を作成し、「道徳の時間」で学習する内容を、他教科や特別活動、給食、日常生活などのあらゆる場面で関連づけて指導できるようにしている。藤澤由紀夫校

長はこう説明する。

『道徳の時間』で学ぶだけでは、なかなか行動には結びつきません。他教科の授業や生活全般を通して学び、実践する中で、意識は育まれるものです。『今の時期は集中的にこういう心を育てよう』といった方針を明確にし、指導を一貫させています」

「発問」を中心に 授業の内容や流れを検討

「道徳の時間」は、教員の発問を軸に構成される。年間指導計画には、授業の中心となる「テーマ発問」に加え、主な発問例を明記している。

「道徳の学びを充実させる鍵となるのは、教員の発問です。ねらいを意識し過ぎず、子どもの多面的・多角的な思考を促すようにして、多様な考えの中から『自分なりの答え』にたどり着かせる授業を目指し、発問を工夫しています」(藤澤校長)

教員は、毎授業のテーマ発問を記録し、その発問で子どもの思考や議論を活性化させることができたかを3段階で自己評価して、次年度の計



校長

藤澤由紀夫

ふじさわ・ゆきお

埼玉県公立小学校教諭を経て、現職。埼玉県道徳教育研究会副会長兼事務局長。



教諭

小森千奈美

こもり・ちなみ

道徳主任。4学年主任。道徳主任として、全校の道徳教育を牽引。



教諭

高橋健司

たかはし・けんじ

研修主任。6学年主任。道徳に関する研修を取りまとめ、全校の連絡調整を行う。



教諭

前田友美子

まえだ・ゆみこ

2学年主任。低学年の道徳教育を牽引。2017年度、市の道徳教材作成委員として、郷土資料を作成。

面に反映させている。

授業は、全学年共通の「道徳の時間(道徳科)のスタンダード」(図)を基に、各教員が柔軟な発想で自由に展開していく。

導入の「気づく」では、学習テーマに関する問題意識を喚起する。道徳主任の小森千奈美先生はこう語る。

「まず、子どもが『これを考えたい』と思えるよう、主題に関連する体験を思い出させたり、社会問題を取り

図 「道徳の時間(道徳科)のスタンダード」

導入	気づく	<p>◎学習の動機づけを図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> 本時の課題は何か、どんなことを学習するのかという関心と期待を持たせる。自分と深いかかわりがありそうだと意識させることも大切。 この段階で、学習課題を設定する場合もある。
	めぐる	<p>◎ねらいを達成するための中心となる段階。</p> <p>◎子どもが、道徳的価値の理解を基に自己を見つめる。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①教材から主題について考える上で、理解の手助けとなるように条件や状況を押さえる。 ②読み聞かせをする(ペープサート、紙芝居、パネルシアター、視聴覚機器などの活用)。 ③話題を児童の興味・関心を基に整理する。
展開	深める	<p>◎教材を基に話し合う。</p> <p>【話し合いの留意点】</p> <ul style="list-style-type: none"> 教材に描かれた道徳的価値に対する一人ひとりの考え方や感じ方を生かして話し合う。 様々な考え方に触れさせ、多面的・多角的に考えられるようにする。 自分とのかかわりで道徳的価値を理解できるようにする。 自己を見つめられるようにする。 <p>【発問の留意点】</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業のねらいや主題と深くかかわる「中心的な発問」に時間をかける。 考える必然性や切実感のある発問、自由な思考を促す発問、物事を多面的・多角的に考えさせる発問などを心がける。 「中心的な発問」とその前後の発問を一体的に捉える発問を構成する。
	見つめる	<p>◎学習を基に、自己の生き方を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> 日常生活に目を向けさせる、今までの自分を見つめさせる。これからの生き方につなげて考えさせる。
終末	あためる	<p>◎ねらいの根底にある道徳的価値に対する思いや考えをまとめたり、道徳的価値を実現することのよさや難しさなどを確認したりして、今後の発展につなげる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 本時のまとめを書く ・感想発表 ・ゲストティーチャー ・「私たちの道徳」 説話・ことわざ・名言 など。

*大沢小学校提供資料を基に編集部で作成。

上げたりして、自分とのかかわりを意識させます」

「とらえる」では、教材を提示し、読み聞かせなどをしてから、子どもの関心を整理する。その際に重視するのは、教員が考えさせたい主題と子どもの問題意識を重ね合わせていくことだ。2学年主任の前田友美子先生はこう説明する。

「『気になるころはありましたか』と問いかけたり、読み聞かせ中の子どものつぶやきを拾ったりして、子どもの関心を探ります。その後の話し合いが活性化するように、子どもの問題意識と主題を結びつけています」

「深める」では、教室全体で机をコの字型に配置して話し合う。一人ひとりの考え方や感じ方を生かし、多面的・多角的に考えられるよう促す。

「多様性を重視すると、ねらいにたどり着かず『これでよかったのかな』ともやもやしてしまう授業もあります。ただ、校長の『どんどん失敗し

てよい』という言葉を励みに、試行錯誤を重ねています」(高橋先生)

教員がともに悩み、考える姿を見せることで、子どもたちは「道徳の解は1つではない」「自分で考えることが大切だ」と実感し、理解していくという。また、子ども同士の意見をつなぐことも大切にする。

「教員が子どもの考えに関心を持ち、『それはどうして?』と掘り下げていくと、最後に芯となる思いを話すことがよくあります。そうした発言をほかの子どもに投げかけて、話をつなげていきます」(高橋先生)

「見つめる」では、日常生活に目を向けたり、自己の生き方を振り返ったりする。そして、最後の「あためる」では、まとめを書いたり、感想を発表したりして、今後の学びにつなげている。

同校は、これらの取り組みを校外にも積極的に発信している。全教員が年1回、必ず公開授業で道徳の授業を行い、保護者にも授業に参加してもらおう。また、学期に1回、「道徳だより」を家庭と地域に配布し、授業や活動の内容を紹介する。

「道徳教育は、日常生活につながっていますから、家庭や地域と一緒に子どもを育てる視点を持つことを大切にしています」(小森先生)

子どもの成長につながる指導への挑戦を続ける

同校が道徳教育の成果として捉えているのが、子どもの自己肯定感の高さだ。学校独自のアンケートでは、「学級の中で自分らしくいられる」「自分にはよいところがある」といった質問の肯定率は約8割に上る。また、6年生では、文部科学省「全国学力・学習状況調査」で、約95%が「将来の夢や目標を持っている」と答えた。

このような前向きな気持ちが学習意欲につながり、学力も安定している。また、日常生活の中で、思いやりや優しさが育っていると感じる場面も多いという。

一方、教員の異動もある中で、道徳教育への意識や取り組みの差をなくしていくことが、今後の課題だ。

「まずは、全教員が失敗を恐れず、様々な指導に挑戦し続けることが大切だと考えています。子どもは、先生が一生懸命だと分かれば、自分も一生懸命に取り組もうとします。また、子どもの学力や学校生活、家庭生活の向上といった明瞭な変化にしっかり結びつけていくことを常に意識し、さらには取り組みを発展させていきたいと考えています」(藤澤校長)

次号予告

後編では、「評価」について取り上げます



学力調査の結果を基に課題を抽出し、 小・中の指導改善に結びつける

岩手県北上市は、小・中9年間の長期的なスパンで児童生徒の学力向上を図ることが課題となっていた。そこで、小・中の教員が学力調査の結果や課題を協働で分析し、学力向上に結びつける施策を進めている。

学力向上へのステップ	背景と課題	実践のポイント	成果
	<p>◎各種の学力調査で、小学校では平均正答率の上昇が見られたが、中学校では学年が上がるにつれて、平均正答率が下がる傾向がうかがえた。小・中9年間で学力向上を図る必要があった。</p>	<p>◎学力向上を実現するため、学力調査のより有効な活用を目指し、市の学力調査を見直した。調査実施年の年度末までに分析が可能で、今後求められる学力にも対応したベネッセの「総合学力調査」を採択。</p> <p>◎市の「学力向上部会」の取り組みを刷新。同じ中学校区内の小・中の教員が協働で学力調査の分析、課題の共有、課題解決に向けた学力向上プランの作成を行い、その成果を自校で実践。</p>	<p>◎中学校区単位での学力調査の結果分析により、地域の児童生徒の学力状況や必要な手立てについて、小・中の教員間で共有が進んでいる。</p> <p>◎学力向上に有効活用するため、学力調査結果を基にしたPDCAサイクルが構築されつつある。</p>

教育長の戦略

小・中の教員が連携して 学力向上に取り組む

北上市教育委員会 教育長 小原善則

施策の2本柱は、児童生徒の 健全育成と学力向上

子どもの健全育成と学力向上は、どの地域でも学校教育が取り組むべき2つの柱だと思っています。子どもの生活が落ち着いていなければ、学力向上は望めません。ですから、私は北上市の教育長に就任して以来、この2つを重視して施策を行ってきました(図1)。

子どもが落ち着いて学びに向かえているかどうかを測る1つの指標として注視しているのは、不登校の出現率です。2010年度、本市の中学生の不登校出現率は、全国平均を下回っていましたが、岩手県の平均では上回っていました。そこで、2011年度から、市内の全小・中学校に週1回の「校内支援会議」を導入しました。これは、校長、副校長、生徒指導主事、学年主任、スクールカウ



おばら・よしのり 岩手大学教育学部卒業。岩手県内の公立中学校教諭、岩手県教育委員会指導主事、公立中学校教頭、校長を経て、2011年度から現職。

ンセラー、養護教諭などが集まり、児童生徒一人ひとりの状況を確認し、手立てが必要な子どもについては連

携して対応するという取り組みです。

この会議を始めたことで、2014年度にかけて、不登校出現率は全国平均や県平均を大きく下回るようになりました。さらに、不良行為少年補導数についても著しく減少するといった、大きな成果が得られました。

小・中の教員が協働し、 学力調査の結果を分析

学力向上の施策については、まずは児童生徒の学力状況を把握することが重要だと考えています。

2017年度の文部科学省「全国学力・学習状況調査」では、小学生の国語と算数のA問題・B問題ともに全国平均を上回っています。しかし、中学生では、国語のA問題を除いて全国平均を下回り、特に数学はA問題・B問題ともに全国平均からは5ポイント以上の差がありました。そこで、中学校での指導をさらに強化し、改善したいと考えています。

今重視しているのが、小中連携の強化です。本市では2016年度から、ベネッセの「総合学力調査」を小学4年生と中学2年生を対象に実施しています。その2016年度の調査結果を、2017年度は小・中学校教員から成る「学力向上部会」で分析して課題を浮き彫りにし、「学力向上プラン」を立てて、各校で実践するようにしました。児童生徒の学習状況やつまづいている箇所などに関して、各校で講ずる対策を同じ中学校区内の小・中学校が共有することで、9年間を見据えて学力向上に取り組んでいくことをねらいとしています。

児童生徒の学力状況の分析は、これまで「全国学力・学習状況調査」や県の「学習定着度状況調査」の実施ごとに、教育委員会が行ってきました。ただ、その分析結果が学校現場に共有され、指導改善に生かされていたかという点、十分でない部分

図1 2017年度 北上市学校教育行政指針

基本目標 郷土を愛し 未来を拓き いのち輝く 人づくり

重点施策 生きる力や豊かな人間性をはぐくむ学校教育の推進

- 1 確かな学力の定着
- 2 校内研究・研修の充実
- 3 英語力と科学力の強化
- 4 生徒指導の機能を生かした自己指導能力の育成（積極的な生徒指導）
- 5 いじめの積極的な認知による早期発見、解消（いじめ報告）
- 6 道徳の時間を要とした道徳教育の充実（「特別の教科 道徳」）
- 7 豊かな人間性や社会性をはぐくむ特別活動の充実
- 8 自ら考え自ら学ぶ力をはぐくむ総合的な学習の時間の充実
- 9 体力づくりに励む児童生徒の育成と学校保健の充実
- 10 復興教育の推進
- 11 キャリア教育の充実

*北上市提供資料を基に編集部で作成。

もあったと思います。そこで、「総合学力調査」の実施にあたっては、実施の趣旨を学校現場にも丁寧に説明して理解してもらい、教育委員会から学校への上意下達ではなく、教員自身が分析や計画の作成に臨めるようにしました。

学力調査もただ実施するだけでは意味がありません。いかにして学力向上につながる事業にするかが鍵だと考えています。

市の将来構想を踏まえ 英語力と科学力も強化

本市では、「英語力」と「科学力」の強化にも取り組んでいます。英語力強化については、ALTの増員、英語キャンプやステップアップ英語講座の実施、英語スピーチコンテストの開催などを行っています。科学力強化では、児童生徒が夏休みに取り

組んだ自由研究の成果を発表する科学研究発表会や、中学生によるロボットコンテストを開催しています。

本市は、工業団地が多く、製造業や建設業などの第2次産業が盛んな地域です。さらに、北上山地の地下には、世界最先端の素粒子実験施設「国際リニアコライダー」を建設する計画があります。これが実現すれば、世界中の研究者や技術者が本市に拠点を移す可能性が高く、市全体としてそうした海外の人たちとの交流の機会が多くなるでしょう。その時のためにも、子どもたちに国際舞台で活躍できる英語力と科学力を育てていきたいと考えています。

そうした教育を行う際に不可欠なのは、やはり教員の指導力です。現場の教員一人ひとりに思う存分力を発揮してもらえるように、今後も環境を整えていきたいと思っています。

岩手県北上市プロフィール・問い合わせ先

◎岩手県中央部に位置する。1991年、旧北上市、和賀町、江釣子村が合併して現在の市域となる。奥羽、北上山系の山々と、北上川、和賀川が流れる自然豊かな環境である一方、古くから交通の要衝として栄え、北東北の物流ネットワークの中枢を担う。

◎人口 約9.3万人 ◎面積 437.6km²

◎市立学校数 小学校17校、中学校9校 ◎児童生徒数 約7,600人

◎住所 岩手県北上市芳町1-1 ◎電話 0197-64-2111 (代)

◎URL <http://www.city.kitakami.iwate.jp/bunya/kyoikuinkai/>

学力調査を軸に、指導改善のPDCAサイクルを構築

北上市教育委員会

学力調査の有効活用に向け、実施時期や体制を整備

北上市では、これまでも文部科学省「全国学力・学習状況調査」（小学6年生、中学3年生対象）と、岩手県「学習定着度状況調査」（小学5年生、中学2年生対象）のほかに、市独自で学力調査（小学4年生、中学2年生対象）を実施していた。しかし、それらの結果を指導改善に結びつけられていないのではないかという課題意識があった。学校教育課の高橋秀和課長補佐は次のように振り返る。

「学力調査の目的は、児童生徒一人ひとりにどの程度学力がついているのかを測ることだけではなく、調査結果を分析して指導改善に生かすことにもあります。そうした観点で、市の学力調査の実施時期や内容を見直すことにしました」

当時の実施時期は年度当初だったが、その時期の学校現場は忙しく、年間指導計画も既に立てているため、調査結果が出てきても、すぐには指導改善に生かしづらいという課題があった。

「学力調査は、年度後半に実施するのが適切ではないかと考えました。年度当初の調査で分かるのは、前年度までの指導の結果であり、児童生徒への理解が十分とは言えない新年度の先生方では、調査結果の分析も浅いものになりがちです。年度後半であれば、児童生徒の状況を踏まえた上で調査結果を分析でき、児童生

徒の実態により即した次年度の学習指導計画を作成することができると考えました」（高橋秀和課長補佐）

学校現場の意見も聞き、複数の候補の中から採択したのが、ベネッセの「総合学力調査」だ。12月に実施し、年明けに調査結果が返却されるので、結果を分析し、次年度の指導計画に反映する時間を十分に確保できると考えた。

『総合学力調査』は、結果分析のシステムが整っていること、問題が毎年変わっても経年比較ができるテストであることなども、採択した理由です」（高橋秀和課長補佐）

こうして、2016年度から、小学4年生と中学2年生で「総合学力調査」を実施することになった。これにより、学力調査の結果を基に学力の経年推移を把握しながら、9年間を見据えた学力向上のPDCAサイクルを構築する体制が整った。

学力調査の意義を全小・中学校の教員に説明

教育委員会では、学力調査の有効性を高めるため、実施内容や時期を変更した意義と調査結果の活用方法を、学校現場に浸透させることにも注力した。

導入1年目の2016年度は、市内の全小・中学校の教員が参加する「北上市教育研究所発表会」で、「総合学力調査」を導入するねらいとともに、3つの利点を説明した。

利点の1つめは、基礎的な知識・



学校教育課課長
高橋 亨
たかはし・とある



学校教育課課長補佐兼
指導係長
高橋秀和
たかはし・ひでかず

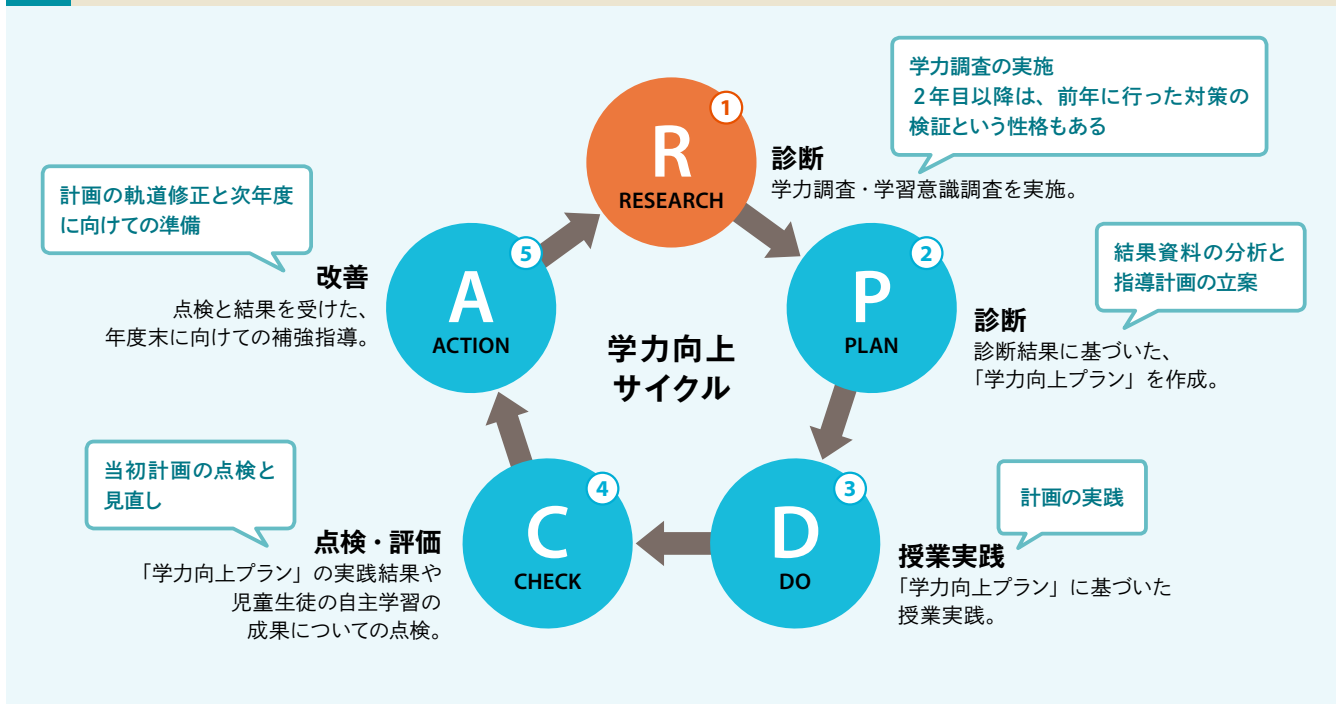
技能の定着だけでなく、新学習指導要領で育成が求められている思考力・判断力・表現力を測る問題も出題されていることだ。これにより、新学習指導要領に即した授業の方向性もつかめると考えた。2つめは、独自の分析システムで、学校ごとに様々な観点から分析できることだ。そして、3つめは、事後学習として、児童生徒一人ひとりに個々の課題に応じた復習プリントが提供されることだ。児童生徒が、それぞれ指定された問題に取り組めば、弱点補強が図られることになる。このように、指導改善や学力向上に生かしやすい調査であることを説明して共通理解を図るとともに、調査結果を活用した指導改善への意識も促した。

さらに、副校長研修会では、分析結果の見方の講習を実施。また、各校の学力向上担当者が参加する研修会では、結果分析システムの操作や分析の方法を実演して説明し、学校現場が調査結果をすぐに活用できるよう、支援した。

中学校区単位で指導改善に取り組む体制を構築

導入2年目の2017年度は、各校の実践が深まるよう、北上市教育研究

図2 北上市の学力向上のPDCAサイクル



*北上市教育委員会提供資料を基に編集部で作成。

所の「学力向上部会」での実践研究に着手した。

同市が学力向上に向けて目指すのは、「総合学力調査」を起点とした指導改善のPDCAサイクルの構築だ(図2)。①学力調査の実施後、②各校が調査結果を分析して「学力向上プラン」を作成し、③それに基づいて指導を行う。④その実践結果の評価と振り返りを行い、⑤計画を見直し、指導を改善していくという流れとなる。調査結果は、指導改善の成果を検証する位置づけとなり、このサイクルをしっかりと回すことができれば、教員の指導力や児童生徒の学力が正のスパイラルとなって高まり続けていくことが期待できる。

PDCAサイクルは学校ごとに構築することが重要だと、高橋秀和課長補佐は強調する。

「児童生徒の学力の状況や持っている教育資源は、学校ごとに異なります。ですから、PDCAサイクルは、各校がそれぞれの学校特性に合わせて構築してほしいと説明しました」

その具現化に向けた研究実践の場となるのが、「学力向上部会」だ。2017年度は、北上北中学校区と南中学校区の小・中学校教員計6人がメンバーとなり、分析方法についての講習を受けた上で、実際に2016年度の調査結果を分析。小・中で課題を共有して、小中連携の観点から指導改善について話し合い、自身の指導改善計画を作成し、それを各自で実践している。年明けに行われる「北上市教育研究所研究発表会」において、「学力向上部会」の研究内容と各校の実践内容を発表し、北上市内の全小・中学校の教員で共有化を図る予定だ。

学校教育課の高橋亨課長は、一連の取り組みのねらいを次のように説明する。

『「学力向上部会」で得た知見を各校に持ち帰って校内に広め、自校のPDCAサイクルの構築に生かしてほしいと考えています。そのため、『学力向上部会』のメンバーは、毎年、異なる中学校区から選ぶ予定です。今

年度も、研究発表会で研究や取り組みの成果を報告し、様々な事例を共有することで、PDCAサイクルを構築するための情報やノウハウを蓄積していきたいと考えています」

高橋秀和課長補佐は、中学校区ごとのまとまりでPDCAサイクル構築の研究に取り組むことに意義があると語る。

「中学校区単位で協働して研究を行うことで、教員は自校だけでなく、小学校は中学校、中学校は小学校の学力の状況や取り組みを把握することができます。これにより、小・中の接続を意識した上で、自校の『学力向上プラン』を立てることが可能になります。また、異なる中学校区の教員とも定期的に交流することで、ほかの中学校区の学力の状況についても把握できるため、視野の広がりも期待できます」

学力調査を軸に、小・中が協働で指導改善に取り組む体制を築きつつある北上市。今後の成果に注目していきたい。

学力調査で苦手分野を把握し、 反復学習で基礎知識の定着を図る

北上市立二子小学校



◎ 1872 (明治5) 年開校。「強く」「賢く」「美しく」を目指す子ども像とし、「心豊かに、夢をもち、世界に羽ばたく飛勢っ子の育成」を教育目標に掲げている。

校長 小原 悟先生
児童数 214人
学級数 11学級 (うち特別支援学級3)
電話 0197-66-2525
URL なし

指導の足並みをそろえる 「学級経営ノート」を作製

豊かな田園地帯が広がる北上市の農村部に位置する北上市立二子小学校では、保護者や祖父母が同校出身という家庭が珍しくなく、明るく素直な子どもが多い。一方で、学びに受け身の姿勢が見られることや、学年間で学力差が目立つことが課題だった。小原悟校長は次のように語る。

「文部科学省『全国学力・学習状況調査』で、2017年度は国語・算数のA・B問題ともに全国平均を上回っていましたが、毎年、同様のよい成果が出ているわけではありません。どの子どもにも同じように学力を育むという観点から、教員集団が同じ方針で指導を行う体制を整えることが重要だと考えました」

そこで、2017年度、小原校長の発案で作製したのが、「学級経営ノート」だ。これは、教務部や生徒指導部などの各分掌の担当者が作成した学習指導や生活指導のあり方を記した文書と、学校経営計画や校長自身の学級経営のあり方に関する考え方をまとめた冊子だ。教務主任の小田島真

弓先生は次のように語る。

「学年ごとの学力差が大きい要因の1つに、教員の指導スタイルにばらつきがあったことが考えられました。『学級経営ノート』によって共通のスタンダードを掲げることで、指導にぶれをなくし、学年間のスムーズな接続を目指したのです」

同じ問題に3回取り組ませ、 知識の定着と達成感を持たせる

こうして教員が軌を一にした上で、学校全体で学力向上のための具体的な取り組みを行っている。

朝学習では、漢字や計算などの基礎・基本の問題や、ベネッセの「総合学力調査」の結果で落ち込みが見られた読解問題などについて、曜日ごとに学習する内容を決めるようにした。そして、その類似問題を出題する「とばせっ子チャレンジテスト」を、1・2学期末に行っている。基礎・基本の定着を図るとともに、子どもに「自分もやればできる」という達成感を持たせることがねらいだ。テストは漢字と計算問題の計50問。正答率90%が合格ラインで、合格者には賞状が授与されるが、不合格なら合



校長
小原 悟
おぼら・さとる

モットーは、「判断基準は子ども」とし、子ども・保護者・地域から信頼される学校経営を推進する



副校長
林 一広
はやし・かずひろ

モットーは、「教師は子どもの鏡。教師が変われば、子どもも変わる」



教諭
小田島真弓
おだしま・まゆみ

教務主任。モットーは、「認め合い、支え合い、喜び合い、寄って集って学校づくり」



教諭
大和田慶子
おおわだ・けいこ

4学年担任。学力向上担当。モットーは、「子どもに分かる喜びを味わわせる指導をする」

格するまで繰り返しテストを受ける。

さらに、6月には、4年生の算数で「二子ニコプリント」(図3)を導入した。これは、算数の既習事項の中でも「角の大きさ」や「垂直と平行」など、知識の定着に課題が見られた単元を中心に、担任が作問したプリントに繰り返し取り組ませるといったものだ。具体的には、毎週水曜にプリントを宿題に出し、翌日に提出されたプリントを担任が採点して児童に返却。週末の「ひとり勉強」として、誤答の問題を中心に繰り返し学習させ、月曜の朝にそのテストを行う。つまり、同じ問題に計3回取り組ませることで、知識・技能の確実な定着を目指している。

4学年担任で学力向上担当の大和

田慶子先生は、次のように語る。

「同じ問題だと答えを丸写しするのではないかという不安もありましたが、子どもはかえって『絶対に100点を取ろう』と意欲的になるようです。保護者からも『確実に問題が解けるようになり、自信につながっている』という声をいただきました」

そうした成果を受け、11月には算数に加えて国語でも実施する予定だ。2016年度の「総合学力調査」で、国語では主語・述語などの文法に、算数では四則計算や小数に課題が見られたため、該当単元を中心に作問する。また、小原校長は、いずれは全学年、通年で「二子ニコプリント」を実施したいと語る。

「課題は、問題作成や採点にかかる教員の負担が大きいことです。そこで、まず一部の学年で実施してノウハウや実績を積み上げていき、教員の加配が得られるなど、タイミングを見計らって、他学年でも取り入れたいと考えています」(小原校長)

プリントやテストだけでなく、日々の授業改善も進めている。教員が授業で一番意識しているのは、「振り返り」だ。林一広副校長はこう説明する。

「学力調査の結果分析を見ると、子どもたちは授業の内容を理解している場合でも、言語化して説明する力が弱いと感じました。そこで、今年度は『振り返り』を重点テーマにして、授業や単元の最後に、振り返りの時間を確保しています」

大和田先生は、毎回、授業の最後に「今日の授業で何が分かった?」と子どもに問いかけ、自分の言葉で説明させるという。

「理科で『空気が押し縮められる』と言うべきところを、『空気がパツとなる』と話す子どももいます。ほかの人にも分かるように説明できることが深い理解につながると考え、振り返りをさせています」(大和田先生)

一方、教員にも、指導の振り返りとして、国語・算数の指導や授業規律に関する約20項目について毎月4段階で自己評価をして提出する仕組みを確立した。その集計結果を全教員に伝えることで授業改善のPDCAサイクルを回している。

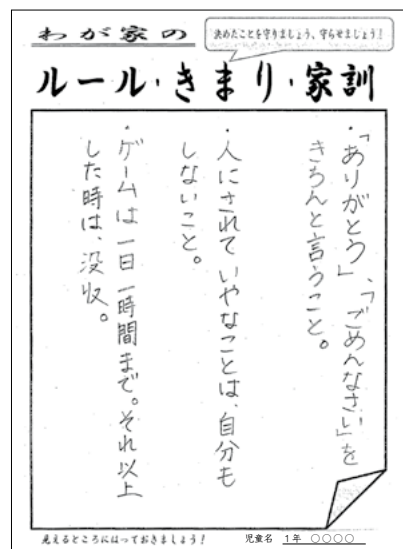
家庭の協力も得ながら 中学校区で学力向上を推進

学力向上には家庭学習も重要になるが、同校は以前から家庭との連携を図ってきた実績がある。

2014年度からは、中学校区内の北上北中学校、更木小学校とともに、「家庭学習強化週間」を設けている。これは、中学校の定期考査前の部活動が休止になる3日間、小学校も連携して家庭学習に集中して取り組むという期間だ。5年生は60分間、6年生は70分間というように、学年ごとに1日の学習時間の目安を設定。テレビ・パソコン・ゲームを消して学習に集中し、できたかどうかを保護者が毎日チェックする。

「学力向上には家庭学習習慣の定着が欠かせませんが、そのためには家庭に落ち着いて学習できる環境が整っ

図4 「わが家のルール・きまり・家訓」



*二子小学校提供資料をそのまま掲載。

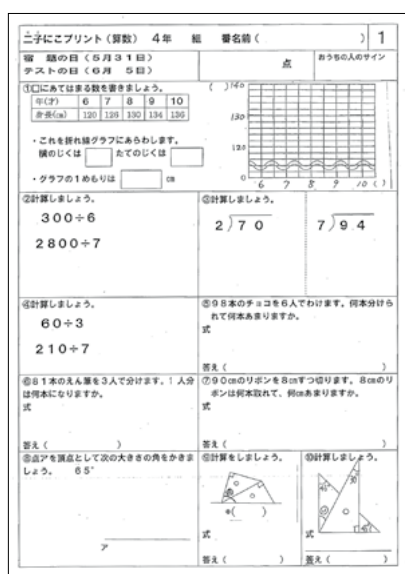
ていることが重要です。保護者に本校出身者が多く、協力的であるという強みを生かして、家庭学習への理解と協力を呼びかけました」(林副校長)

2017年度は、1年生で、家庭で知・徳・体に関する決まりをつくってもらい、紙に書いて家に貼るという「わが家のルール・きまり・家訓」(図4)を始めた。

「低学年のうちに生活習慣が安定した子どもは、高学年になっても生活が乱れず、学習にも集中できます。保護者にそのことを説明して、協力を呼びかけたところ、実施率はなんと100%でした。他学年の保護者からも申し出があり、1年生の兄姉も含めると、全校児童の4分の1が取り組んでいます。次年度も継続し、いずれ全校の取り組みにしたいと考えています」(小原校長)

2017年度、同校の学力向上担当の大和田先生は、市の学力向上部会のメンバーとして「総合学力調査」を活用した学力向上のPDCAサイクルの構築を研究しており、分析結果を基にした苦手分野の知識の定着も図っている。同校は、全教員が一体となって、家庭とも連携しながら、学力の底上げを推し進めている。

図3 「二子ニコプリント」



*二子小学校提供資料をそのまま掲載。

主体的・対話的で
深い学びを実現！

アクティブ・ラーニング 実践講座

小学5年生・理科

意欲を喚起する課題設定と ICTの活用で、対話を 活性化させ、思考を深める

東京都・立川市立第九小学校では、2016年度に校内LANを整備し、ICTを活用した授業改革に取り組んでいる。今回は、課題設定を工夫することで子どもたちに学習課題への関心を持たせ、タブレットを積極的に活用して、子どもたちの対話を促し、深い思考に導いている5年生・理科の授業を紹介する。

単元計画 小学5年生・理科「気候の変化」

ねらい 気象情報を活用して、台風接近時の天気の変化や自然災害などに目を向け、見いだした問題を計画的に追究して、天気の変化についての見方や考え方を養う。

育みたい資質・能力 自然現象についての知識・理解、科学的な思考力・表現力

時数	概要	学習内容・活動	評価【観点】
1 2	台風の接近 (資料調べ)	気象情報を集めて、台風の動きや、台風が近づいた地域の天気を調べる。	<ul style="list-style-type: none"> 台風について意欲的に調べようとする。【関心・意欲・態度】 集めた情報を整理し、結果を記録する。【技能】 資料を読み取り、台風の特徴を考え、表現する。【思考・表現】
3	台風の接近 (まとめ)	台風の動きや天気への影響についてまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> 台風の進路の特徴や、台風と降水量の関係を理解する。【知識・理解】
4 5	天気の変化 (資料調べ)	気象情報を集めて、雲の動きと天気の変化との関係を調べる。	<ul style="list-style-type: none"> 天気について意欲的に調べようとする。【関心・意欲・態度】 集めた情報を整理し、結果を記録する。【技能】 天気の変化と雲の動きを関連づけて考え、表現する。【思考・表現】
6 7	天気の変化 (活用・まとめ)	雲の動きと天気の変化との関係についてまとめ、自分が住んでいる場所のこれからの天気を予想する。	<ul style="list-style-type: none"> これからの天気に関心を持ち、予想しようとする。【関心・意欲・態度】 気象情報を活用して天気の変化を予想し、表現することができる。【思考・表現】 天気はおおよそ西から東に変化していくという規則性があることを理解する。【知識・理解】

今回取り上げる授業 気象情報を分析し、根拠に基づいて天気の変化を予想する

学習内容	学習の主な目標	活動内容（●評価の対象）
1 導入 [第1次予想] (7分)	<ul style="list-style-type: none"> まず直感で天気を予想し、本時では「根拠に基づいて」予想することを確認して、めあてを焦点化する。 既習事項を振り返り、本時の思考の手がかりとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 直感で明日の天気を予想する。 全体で共有し、本時のめあてを確認する。 前時までに学習したノートを見返し、偏西風の規則性や雲の濃さによる天気の変化を確認する。
2 自力解決 [第2次予想] (10分)	<ul style="list-style-type: none"> 過去1週間の気象情報を比較して、明日の天気を予想する。 →科学的な思考力・表現力（気象情報を利用して天気の変化を予想し、表現することができる力）を育む。 	<ul style="list-style-type: none"> ムーブノート^{*1}を活用して、過去1週間の気象情報を読み取り、ワークシート^{*2}に天気と雲画像の予想、根拠を書き込む。 多量の情報の比較、個々の表現、意見の共有を行う。 ●ワークシート（思考・表現）
3 4 グループワーク (10分)	<ul style="list-style-type: none"> グループで各自の意見を共有し、考えを広げる。 グループで1つの予想に絞るために話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> グループのメンバーに自分が書き込んだワークシートを見せながら説明する。 グループで1つの予想に絞り、ミニホワイトボードに記入する。
5 全体共有 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> 他グループの意見を聞き、さらに考えを深める。 	<ul style="list-style-type: none"> ミニホワイトボードを黒板に貼り、グループの代表が天気やその根拠を発表する。 ●発言（関心・意欲・態度）
6 まとめ [最終予想] (8分)	<ul style="list-style-type: none"> グループワークや全体共有での思考を整理し、最終的に自分で予想する。 最新の天気予報の映像を視聴し、明日の天気への期待を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> 明日の天気の予想とその根拠をまとめる。 天気予報を視聴する。 ●ノート（思考・表現）

*第九小学校提供資料から抜粋し、編集部で作成。

*1 ミライシード（P.32 * 3参照）の機能の1つ。各自がタブレットに書き込んだ内容をリアルタイムで共有できたり、学級全員の意見を一覧にして、分類やキーワード抽出により学習状況や理解度を容易に把握できたりする。



授業者

東京都
立川市立第九小学校

竹谷 走 たけや・かける

教職歴4年。同校に赴任して4年目。5学年担任。特別支援教育推進部ICT担当。立川市小学校教育研究会では特別活動部に所属。

実践校

立川市立第九小学校

◎1872（明治5）年、砂川村・流泉寺境内につくられた西砂川学校を前身とする。2016年度から立川市のICT研究校に指定。栽培活動、和太鼓などの体験活動を重視している。

校長 小林邦子先生

児童数 515人

学級数 21学級（うち特別支援学級5）

電話 042-536-2231

URL <http://www.tachikawa.ed.jp/es09/>

1 導入 [第1次予想]

▶▶▶ 7分



「将来、気象予報士になりたい人はいる？」と興味を持たせながら、まず直感で明日の天気を予想させ、晴れ・曇り・雨・その他のいずれかに挙手をさせた。次に、前時までのノートを読み返させ、偏西風の規則性や雲の濃さなどが雨の条件であることを子どもから引き出し、板書して全体で共有。また、それらはあくまでも条件であり、その通りにならない場合があることを伝える。

2 自力解決 [第2次予想]

▶▶▶ 10分



先生が用意した「ムーブノート」のワークシート2に入っている過去1週間の天気図や、ワークシート3に入っている「アメダス」「雲画像」などの基礎用語の解説を参考にしながら、児童一人ひとりで考え、明日の天気を予想した。ワークシート1には、自分の予想する天気と雲画像、その根拠を記入する。雲画像は、タブレットの画面を指でなぞって、日本地図の上に描いていく形だ。

主体性を引き出す工夫

広がりのあるテーマ設定で子どもの主体的参加を促す

東京都西部の立川市の住宅街にある立川市立第九小学校では、「自ら学ぶ子」を重点目標として、2016年度から全クラスでICT機器を活用した効果的な指導法を研究している。

子どもたちは素直で、授業に向かう態度は前向きであり、宿題にもしっかり取り組むなど学習意欲はおおむね高い。一方で、自分を表現することに抵抗を感じる児童もいて、グループワークでは発言者が固定化してしまう傾向も見られた。5学年担任の竹谷^{かほ}先生は、次のように話す。

「子ども一人ひとりが活躍できる場面を増やしていきたいという思いから、どの教科の授業でも、できる限りグループワークを取り入れるようにしています」

今回紹介するのは、5年生・理科「天気の変化」の単元のまとめとして行った授業で、めあては「根拠に基づいて、明日の天気を予想しよう」。まず、

直感で天気を予想させてから、前時までに学習した雨が降る条件を復習。次に、過去1週間の天気図を見ながら、個人で明日の天気を予想させた。それを基に4人グループで話し合っで予想する天気を1つに絞り、その理由とともにクラス全体で共有する。

深い学びのある議論とするために、竹谷先生は普段から課題設定を工夫し、答えや見解が複数あるテーマや、意見の対立があるテーマから、簡単には答えが出ないような発展的な問いを設定している。例えば、見解が複数ある課題として、「天気の変化」の4・5時間目に、雲の動きと天気の変化の関係を学ぶため、複数日の雲画像と降水量を示した図を、時系列に並べ替える活動を行った。

「課題は、子どもの意見が分かれるようなテーマを設定しています。話し合いの中で感じた『なぜだろう』という疑問が、主体的に学ぶ意欲を喚起し、思考の深まりや議論の広がりが期待できるからです」(竹谷先生)

さらに、各自に自分の考えを持たせた上で議論に臨ませている。

「自分の考えや立場を持たないまま話し合うと、議論が上滑りしたり、傍観者になる子どもが出たりしてしまいます。特に、今回は難しいテーマで資料も複数あったので、個人で考え、まとめる時間をしっかり確保しました」(竹谷先生)

また、グループワークが単なる雑談にならないよう、今回は「グループで予想を1つに絞る」という目的も設定。異なる意見がぶつかり合う中で、より深い理解に到達したり、折り合いをつけたりすることを期待した。

対話の場づくりへの配慮

1か月半をかけて徹底したクラスづくりを行う

竹谷先生は、グループワークを積極的に取り入れるにあたって、クラスづくりにも力を入れてきた。

「良好な人間関係が築かれていないと、勉強のできる子の意見に合わせたり、相手の意見を頭ごなしに否定したりするなど、考えが深まるような話し合いにはなりません。本校で

*2 ムーブノートの機能の1つ。テキストだけでなく選択形式など、授業展開に合わせたワークシートの作成、配信が可能。あらかじめ収録されたワークシートも利用できる。

3 グループワーク

▶▶5分



4人1組のグループになり、ワークシートに書き込んだ自分の予想を見せながら、メンバーに根拠を示して説明していく。この間、竹谷先生は机間指導をしながら、「このグループがよい見せ方をしているよ」と、途中で画面の示し方が上手なグループを紹介。どのグループもスムーズに話し合いができるよう、全体に目を配った。

4 グループワーク

▶▶5分



意見を共有した後、グループで予想を1つに絞り込む。子どもたちは雲画像を示しながら、「4時間ごとに東に雲が動いている」「関東地方の面積1つ分の雲があるよ」などと話し合い、予想と根拠を集約してミニホワイトボードに書き込んでいく。竹谷先生は、話し合いの様子を見ながら、「まずは予想の理由から書いてみたら?」「根拠が多い方が説得力は高まるよ」と声をかけていく。

は5年生進級時にクラス替えがあったため、年度の早いうちにクラスの間関係づくりを行うことが、授業の質を高める上でも重要だと考えました(竹谷先生)

そこで、竹谷先生は、4~5月にかけて、朝学活の10分間にグループ対抗のレクリエーションをメンバーを替えながら繰り返し行った。こうして、クラス全員と交流して互いを知り、心の壁をなくして安心して発言できる雰囲気をつくったことが、議論を活性化させる素地になっている。

もう1つ、グループワークの場づくりの工夫にICTの活用がある。同校ではベネッセの「ミライシード」*3を



写真1 竹谷先生は、天気を予想するために必要な資料をあらかじめ用意。子どもたちはムーブノートでそれらを見て、既習事項と関連づけながら、明日の天気を予想した。

活用し、協働的な学びの活性化を図っている。今回の授業でも、天気を予想する際にミライシードの「ムーブノート」を活用して複数の気象データを提示し、子どもが各自で比較・検討して考えられるようにした(写真1)。また、クラス全員の予想をリアルタイムで共有できるため、教員は机間指導をしなくても、子どもの意見を拾いやすくなったと、竹谷先生は言う。

「大勢の前ではなかなか意見を言えない子どもにとって、ムーブノート(写真2)はその子なりの表現方法の1つになり得ると思っています。いろいろな子どもがいる中で、多様な表現の機会を確保することは重要です」一方で、ICTと紙のそれぞれの特



写真2 ムーブノートのワークシートには、本時の課題が提示され、自分の考えを書き込めるようになっている。

性に応じた使い分けも意識する。今回の授業では、最終予想となるまとめを自分の言葉でノートに書かせることで、知識の定着を図った。

「何となく盛り上がりただけで議論が深まらなかったということがないよう、ICTの活用方法を工夫していきたいと考えています」

授業を終えて

想定を超える議論の深まりが見られた

授業の最後に、竹谷先生はポケットから手紙を取り出し、「私は先生の授業を受けて天気に興味を持ち、大学卒業後は気象庁に勤めています」と読み始めた。15年後に卒業生から届いたという設定で、竹谷先生が用意した手紙だ。「将来、こんな手紙が届くことを期待して、今日の授業を終わります」と先生。学習内容を日常生活と結びつけたり、将来につなげたりしてほしいという意図を込めた。

今回の授業では、多くの子どもが根拠を述べながら議論を進められて

*3 「ムーブノート」「話し合いトレーニング」「ドリルパーク」の3つのアプリケーションで構成された、ベネッセのタブレット学習プラットフォーム。

5 全体共有

▶▶▶ 10分



各グループの予想が書かれたミニホワイトボードを黒板に貼り、全員がモニターの前に車座になって意見を共有する。「発表した人は？」と竹谷先生。挙手をした子どもに指示棒を渡し、「それでは明日の天気です。気象予報士のAさんどうぞ！」という合図で、子どもは気象予報士になりきり、天気図を示しながら雲の動きなどを説明する。今回は、3グループが発表を行った。

6 まとめ [最終予想]

▶▶▶ 8分



グループワークや全体共有を通して得た気づき、意見の変化などをまとめ、個人でノートに最終予想と根拠を記入。今回はまとめの時間が少なくなりましたが、ノートに天気図をしっかり描いて、学んだことを整理する子どもが多く見られた。最後に、先生が用意した、気象予報士になったという教え子からの架空の手紙を読み、日常生活や将来への意識づけを図った。

いた。意見を述べ合い、比較・検討しながら、時には異なる意見の友だちと折り合いをつけて、1つの結論を出した。また、「午前と午後に分けて予想を考えよう」など、前提条件を整理してから議論を進めるグループもあった。「私自身が想定していなかった議論の進め方もあり、子どもに思考の深まりが見られたのは大きな成果です」と竹谷先生は語る。ただ、個人で考える場面に予定よりも時間がかかり、まとめの時間が少なくなったことは改善したいという。

このクラスを受け持って半年、グループワークにしっかり取り組む子どもが増えてきたのは大きな成果だと、先生は手応えを感じている。以前は知識があっても発展問題を苦手とする子どもがいたが、今はテストの発展問題での無解答も減ったという。

「子どもたちは、知識を活用することや自分を表現することに慣れてきていると感じます。こうした子どもたちの前向きな姿勢を、実際のテストなど、教科学力の向上に結びつけることが今後の課題です」(竹谷先生)

アドバイザーが語る実践のポイント

子どもの意見への価値づけが大切

子どもの意欲を引き出すめあてを設定し、どの既習事項を用いて考えるのかを提示するなど、明確で分かりやすい授業だったと思います。子どもが自分で比較や類推、関連づけを行える資料を用意し、科学的な思考を働かせるための工夫もできていました。教え子の手紙を紹介するという演出からは、授業で学んだことを日常生活の興味・関心や将来につなげてほしいという竹谷先生の願いも見えました。

ただ、全体共有の場面で、子どもたちが立てた予想を丁寧に拾い、価値づけをする場面があれば、もっとよかったと思います。ミニホワイトボードに線を引いて「ここがよかったね」と確認したり、大事だと思うところを子どもに改めて言わせたりすることで、子どもたちの思考はさらに深まり、次に自分の考えを持つ際の根拠にもつながるはずです。



校長
小林邦子
こばやし・くにこ

時には構成の大胆な組み換えも必要

今回の授業は、前時の復習に始まり、グループワーク、まとめという基本的な流れでしたが、授業構成を大きく変えても効果的だったと思います。例えば、グループワークに入る前の段階を前時まで終わらせておき、先生は提出物を見て、子どもの意見を一通り押さえた上で、本時をグループワークから始めれば、子どもたちの意見をより生かした授業展開が可能になったかもしれません。

ICTを有効活用している点はよかったと思います。子どもたちにとって、タブレットが学習ツールの1つとして定着している様子がかげえました。先生も机間指導の中で、タブレットの示し方が上手なグループを紹介するなど、機器の使い方の指導にも配慮していた点が優れていたと思います。



教務主任
南枝弘之
なんし・ひろゆき

子どもたちの「語彙力」を高めるヒントとは？

資質・能力の基盤として語彙力の育成を重視する方向性が文部科学省から示されています。「現代人の語彙に関する調査」からその指導のヒントを探ります。

※本調査では、対象の言葉のうち回答者が「知っている」と答えた割合をその人の「語彙力」としています。

1 アクティブ・ラーニング*1は「語彙力」の育成に有効

図1 [第2回調査より] アクティブ・ラーニングの経験別「語彙力」(高校生)(抜粋)

項目	語彙力 (%)	差
どのように調べればよいかを考える	する (689人) 65.6	17.3
	しない (351人) 48.3	
観察・実験や調査などで考えを確かめる	する (409人) 68.9	15.1
	しない (631人) 53.9	
自分の関心にあった学習テーマを決める	する (509人) 66.7	13.6
	しない (531人) 53.1	
調べたことを文章にまとめる	する (559人) 66.0	13.4
	しない (481人) 52.6	
自分の考えを図表や写真などを使って表現する	する (389人) 68.1	13.2
	しない (651人) 54.8	
友だちの意見を聞いて自分の意見と似ている点や違っている点を考える	する (595人) 65.1	12.5
	しない (445人) 52.6	
グループで活動をふりかえって何がよかったか悪かったかを考える	する (501人) 66.0	12.0
	しない (539人) 54.0	
学習のまとめをみんなの前で発表する	する (496人) 65.8	11.5
	しない (544人) 54.3	

注1) 質問「次のような授業での学習をどのくらい行っていますか。それぞれについて、あてはまるものを選んでください」について、各項目の回答「よくする」「ときどきする」を「する」、「あまりしない」「ほとんどしない」を「しない」として集計。

注2) 数値は、小数第二位を四捨五入している (以下同)。

「語彙力」と行動・意識には関連性が

言語力は、情報を正しく理解し、自分の考えを分かりやすく伝えるために重要であり、すべての学習の基盤となる力だ。

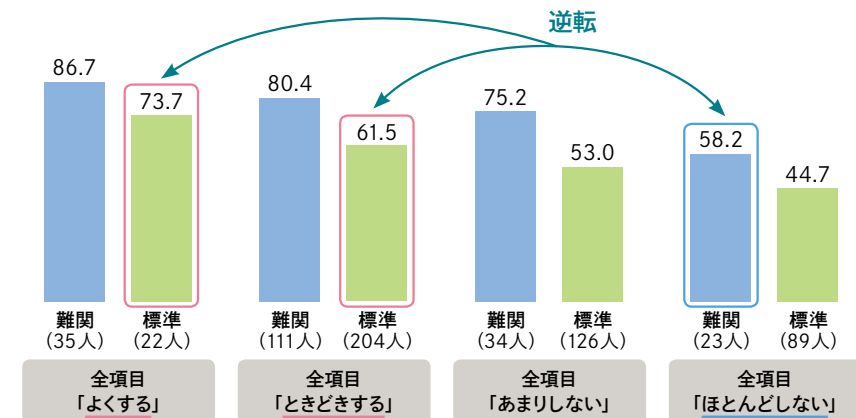
本調査では、言語力の根幹となる「語彙力」と行動・意識の関連性を分析している。今回は、「語彙力」が高い高校生の特徴から、「語彙力」を高める指導のヒントを探っていく。

アクティブ・ラーニングの経験と「語彙力」

まず着目したのは、学習活動と「語彙力」の関連性だ。図1は、授業でのアクティブ・ラーニング (以下、A L) の経験による「語彙力」の違いを分析した結果である。

授業でA Lの各活動をすると答えた高校生の方が「語彙力」が高いことが分かる。他者の考えを聞く、資料を調べるといったインプットと、自分の考えをまとめ、伝える・発表するといったアウトプットを、A Lの授業を通して日々繰り返すことが、「語彙力」を高めることにもつながっていると考えられる。

図2 [第1回調査より] アクティブ・ラーニングの頻度別「語彙力」(高校生) (%)



注1) 質問「次のような授業での学習をどのくらい行っていますか。それぞれについて、あてはまるものを選んでください」に対する項目「自分の考えや学習の成果をみんなの前で発表する / テーマについてグループで話し合う / 調べたことを文章にまとめる」を1つにまとめ、「よくする」「ときどきする」「あまりしない」「ほとんどしない」と答えた各群の語彙力を、通学校のタイプ別に比較した。

注2) 「難関」「標準」は、現在通っている学校について、回答者に選択してもらった結果による。

A Lの実施有無で「語彙力」の逆転も

さらに、学力によらず、A Lと「語彙力」が関連している可能性も見えている。

図2は、授業でのA Lの頻度と「語彙力」の関係を、通学校別に分析した結果だ。A Lを「よくする」「ときどきする」と答えた「標準」校の高校生の方が、A Lを「ほとんどしない」と答えた「難関」校の高校生よりも「語彙力」が高いという結果が出た。A Lを実施している方が、学力にかかわらず「語彙力」が高いという結果は、A Lの「語彙力」育成の有効性を示すものと言えるだろう。

出典 「現代人の語彙に関する調査」

「語彙・読解力検定」を主催するベネッセコーポレーションが、全国の高校生から社会人までの3,130人を対象に、2016年に第1回、2017年に第2回調査を実施(各回ともに調査時期は7月)。辞書語彙^{*2}、新聞語彙^{*3}から厳選した540語の「熟知度」^{*4}を調べ、言語活動の実態、年代、生活、行動などによる「語彙力」の違いを明らかにすることで、現代人に必要な言葉の力を高める方法の検討を目的とする。

◎詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。

<http://www.goi-dokkai.jp/research/index.html>

語彙・読解力 検定

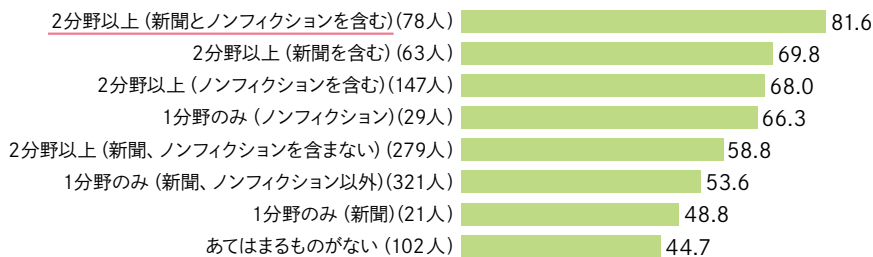
「語彙・読解力検定」は、ベネッセコーポレーションと朝日新聞社が主催する、社会に必要な「ことばの力」を測る検定。2011年の開始以来、累計約33万人が受検している(2017年8月時点)。

ごいどっかい

検索

2 多様な分野の読書が「語彙力」を高める

図3 [第1回調査より] 読書の種類別「語彙力」(高校生) (%)



注) 質問「次のような本や文章を読みますか。読むことがあるものをすべて選んでください」/選択肢「フィクション(物語や小説など)」「ノンフィクション(新書、実用書など)」「マンガ」「新聞」「雑誌(マンガを除く)」「この中に読むことがあるものはない」。

次に、読書と「語彙力」の関係を見ると、読書量が多い高校生の方が「語彙力」が高いという結果に加えて、多様な分野の本を読む高校生の方が「語彙力」が高いことが分かった。特に、新聞やノンフィクションを含む分野を読む方が、「語彙力」も高い(図3)。物語や小説だけでなく、新聞やノンフィクションなど幅広い分野の文章に親しむことが、多様な語彙身につけるきっかけになると言えそうだ。

3 学校での長い作文や年長者との会話が「語彙力」につながる

図4 [第1回調査より] 学校で長い文章を書く頻度別「語彙力」(高校生) (%)

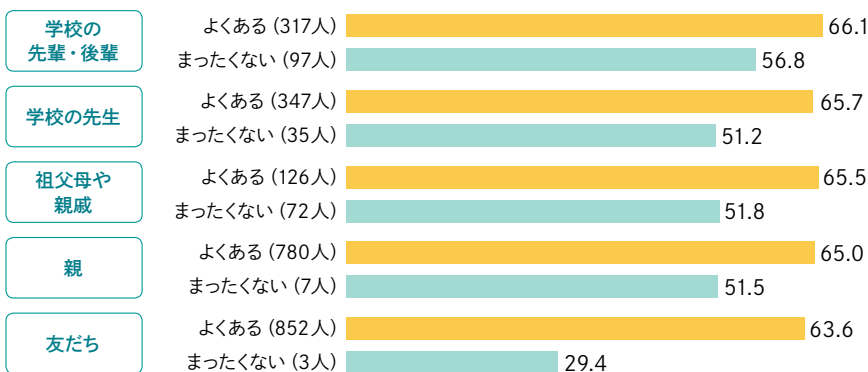


注) 質問「ふだん、次のような学習をどのくらい行っていますか。次のそれぞれについて、もっともあてはまるものを選んでください」に対する項目「学校や職場で長い文章(手紙、作文、レポートなど)を書く」への回答。

さらに、書く、話すなどのアウトプットの機会も「語彙力」と関係があることが分かった。図4を見ると、学校で長い文章を書く頻度が高いほど、「語彙力」が高いことが分かる。「ほぼ毎日」書く場合と「しない」場合とでは、20.0ポイントもの差があった。

また、「話す」については、「学校の先生」、「祖父母や親戚」、「親」など、年齢差のある人との会話の頻度が高い方が、「語彙力」が高いという結果だった(図5)。

図5 [第1回調査より] 身近な人との会話の頻度別「語彙力」(高校生) (%)



注) 質問「身近な人と話す機会が、どのくらいありますか。あてはまるものをそれぞれ選んでください」についての選択肢「よくある」「ときどきある」「あまりない」「まったくない」「いない」のうち、「よくある」「まったくない」のみを抽出。

このように、「語彙力」が高い高校生の特徴を見ると、ALや多様な分野の読書活動を取り入れるほかに、インプットした内容を話し合う、まとめて書く、異なる年齢や立場の人と話すといったアウトプットの機会を提供することが、「語彙力」を高めることにつながると考えられる。授業づくりや保護者への働きかけの参考にしたい。

*2 主に国語辞典に掲載されている、文章や会話を理解し、的確に表現するために必要な語彙。 *3 新聞に掲載されることの多い、社会生活に必要な基礎知識や時事知識に関する語彙。 *4 調査対象の各語について、「知っている」と回答した回答者の割合。

Reader's VIEW

2017 Vol.2 特集「小学校英語の教科化に備える」へのご意見

このコーナーでは、編集部寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

*『VIEW21』教育委員会版のバックナンバーは「ベネッセ教育総合研究所」ウェブサイト (<http://berd.benesse.jp/>) でご覧いただけます。

◎小学校英語の教科化に際し、各担任の指導力向上を図るには、英語を子どもとともに楽しむことが大切になります。英語が苦手だからと逃げるのではなく、1つでも多くクラスルーム・イングリッシュを使うことを目指し、子どもとともに学ぶという姿勢が大事だと考えます。本校でも、指導が上手な先生は、外国語指導員に任せきりにせず、自身の活動の場を増やそうとしています。(富山県)

◎特集では、特に授業スタイルの確立の重要性を感じました。その点で、座談会で紹介されていた単元目標から逆算して授業を設計する「バックワードデザイン」は分かりやすく、「振り返りカード」もこれからアクティブ・ラーニングを進めていく上で役に立つと思いました。(千葉県)

◎2018年度からの小学校英語教育の先行実施に向けて、文部科学省の直山木綿子教科調査官のインタビュー記事は大変参考になりました。特に、移行措置や文字指導の捉え方について明確にいただいたことで、学校現場への伝達や取り組みの推進がしやすくなると思います。(愛媛県)

◎小学校英語の教科化に向けて、教員、学校、地域間で差が出ないよう、事例1で群馬県教育委員会が共通カリキュラムを作成し、どの教員も見通しを持って同じ目線で授業ができるようにしていることに共感しました。また、指導主事が学校を訪問し、現場の教員とともに授業づくりに取り組んだことも大きかったと思います。(東京都)

◎小学校英語の教科化に際して、教員の不安を少しでも取り除くことが課題となっていますが、特集を読み、教員自身が失敗を恐れず取り組む姿勢が必要なのだと強く感じました。その点で、事例2の東京都町田市立本町田東小学校の記事の中で『「英語を」教えるのだと肩肘張らずに、『英語で』コミュニケーション力を高めるきっかけをつくる』という言葉が印象に残りました。(東京都)

◎巻頭記事「近未来展望」で、埼玉県熊谷市の「ラウンドシステム」に関心を持ちました。私は英語科の担当ではありませんが、そのエッセンスは自分の教科にも取り入れられると考えます。また、巻末記事「私の仕事、私の願い」の群馬県草津町教育委員会の5歳児運動健診の話が印象的で、誌面から子ども一人ひとりの発達特性を把握しようとする様子がよく伝わってきました。(石川県)

◎連載「学力向上へのステップ」で、岡山県和気町が地域人材や民間企業と手を携えた動きをつくり、子どもたちに学びの保障をしているところに魅力を感じました。地域人材の活用は様々な自治体で行われていますが、そこにアセスメントの分析を通して手立てを考えるという民間企業の知見を生かしている点が新しいと思います。(岐阜県)

◎私立学校には、特色のある教育や研究実践を進めているところが数多くあります。「VIEW'S REPORT」で紹介された愛知県豊明市の事例のように、公・私立の枠を超えて授業研修会を実施し、私立の先生方と授業づくりの話し合いなどができれば、とても有効だと思いました。(福島県)

◎英語科における「深い学びとは何か」を模索し続けていたので、「アクティブ・ラーニング実践講座」に興味深く読みました。「生徒の意欲を増すこと」「生徒による気づき」、また「相手との自然な対話」「生徒の学ぶ姿勢に変化が見られること」などが、私の疑問を解決する糸口として示唆を与えてくれました。(香川県)

◎連載「データで教育を読む」が興味深かったです。「勉強嫌いになる要因」は、様々なことがすぐに思い浮かびますが、「勉強好きになるきっかけ」にはなかなか目が向きません。内発的動機づけやモニタリング方略などによって学習意欲が高まり、ひいては進路を深く考えるまでに至ることが、調査結果によって再確認できました。(青森県)

編集後記

今号では新しい試みとして、特集でご紹介した川崎市立東菅小学校の授業の様子を動画でも見られるようにしました(詳細はP.14参照)。これは、「すべ」を用いた授業を教育委員会の先生方が具体的にイメージでき、学校にも勧めやすくなることをねらったものです。ぜひアクセス・ご活用いただければと思います。また、右の巻末ページでは、新たに自治体に焦点を当てたコーナーがスタートしました。様々な角度から自治体の取り組みをご紹介していきたいと思っております。ご期待ください。(岡本)

VIEW21 教育委員会版 2017 Vol.3 2017年11月20日発行/通巻第11号

発行人 山崎昌樹
編集人 春名啓紀
発行所 (株)ベネッセコーポレーション
ベネッセ教育総合研究所
印刷製本 凸版印刷(株)
編集協力 (有)ベンダコ
執筆協力 二宮良太、中丸満、長谷川敦
撮影協力 荒川潤、川上一生、コスガ総一、
筒井岳彦、ヤマグチイキ

◎お問い合わせ先
フリーダイヤル 0120-350455
〒700-8686
岡山市北区南方3-7-17

不易と流行が融合した小中一貫教育で大きく羽ばたく子どもを育む



英語の授業では、電子黒板も活用して、子どもたちの意欲を上手に引き出している。また、市内の小・中学校の英語担当教員による英語教材開発委員会が、市内の名所・旧跡や行事などを英語で紹介した、かるたとランプを製作。地元のよさを英語で発信する力をつけてほしいという思いが込められている。



「これからの高岡の教育を考える懇談会」では、地元の教育界・経済界に従事する人や地元出身の政府関係者、保護者などを招き、地域・日本・世界の視点から今後の教育のあり方を討論した。



全市立学校の小学5・6年生、中学1年生を対象に行われている「ものづくり・デザイン科」では、高岡の漆器や銅器について学ぶ。また、職人から直接指導を受けながら自分でデザインし、制作した作品は、市が主催する展覧会で一般公開される。卒業後も作品を大切に保管している子どもが多いという。ペン皿やブローチなどの題材は学校ごとに毎年検討されるが、中学校区内で連携し、3年間で重複しないよう調整している。



富山県高岡市では、2006年度から、地元の工房や工芸技術者などと連携し、伝統工芸を学び、作品を制作する「ものづくり・デザイン科」の活動を、全市立学校の小学5・6年生、中学1年生を対象に行っている。

400年以上受け継がれている漆器や銅器などについて学ぶことで、地域理解が深まるとともに、作品の制作を通して一人ひとりのよさに光があたり、自己肯定感が育まれるという成果も出ている。また、地域との信頼関係が築かれ、保護者からの評価も高い。今後は、作品の紹介文を英語で書いて、ウェブで世界に発信したり、作品のデザインをパソコンで描いたりといった新しい要素を加えた指導の深化を構想している。

そうした強みを土台に、小中一貫教育の推進にも着手した。米谷和也教育長は、そのねらいを次のように語る。

「幼稚園・保育園から大学院までの連続した学びの充実を図るため、小・中が連携し、世界を視野に入れた義務教育段階の学びを実現する必要があると考えています」

まずは英語教育やICT教育で小中連携を進めていく。例えば、英語教育では、現在、ALT、JTE*、英語専科教員を各小学校にローテーションで配置し、授業は担任とのチーム・ティーチングで行っている。これに加えて、中学校の英語科教員の乗り入れ授業も行えるようにし、小学校での英語教育の向上と、小・中のスムーズな接続を図る。

「『伝統は革新の連続』と言われてるように、学校教育も不易を継承しつつ、時代に応じた挑戦が必要です。地域とともに、我々の予想を超えて成長していく子どもたちを育てていきたいと思います」(米谷教育長)



教育長
米谷和也

こめたに・かずや

富山県公立学校教員として小学校、中学校、高校に勤務。富山県教育委員会、富山県立高岡高校校長等を経て、現職。

高岡市プロフィール

2005年、旧高岡市、旧福岡町が合併し誕生。豊かな歴史・文化資産やものづくりの伝統に支えられた歴史都市。2016年、「高岡御車山祭」がユネスコの無形文化遺産に登録されたことから5月1日を「高岡の歴史文化に親しむ日」に制定。

人口 17万3454人 面積 209.57km²

公立学校数 小学校26校、中学校12校、特別支援学校1校

児童生徒数 1万1992人

電話 0766-20-1443

URL <https://www.city.takaoka.toyama.jp/kosodate/iinnkai/index.html>



表紙の写真は、高岡市立能町小学校の5年生の外国語活動の様子です。

* Japanese Teacher of English の略。日本人英語指導者のこと。